

2027
共通テスト
直前対策問題集

第5回

国語

200点／90分

第5回

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に①～④の番号を付してある。

（配点 45）

sample

Sample

sample

Sample

(注)

- 1 グローバリゼーション——世界が地球規模で一元化していくこと。
- 2 ナショナル——国家的。
- 3 シャトル——特定の区間を定期的に往復する輸送便。
- 4 immigrant——外国からの移民。
- 5 エスニック——民族的。人種的。
- 6 シティズンシップ——市民権。

Sample

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

シキンセキ

1

- ① 式にレツセキした人々
- ② ガンセキの標本
- ③ ジュウセキを果たす
- ④ コセキ抄本

(ウ)

コヨウ

3

- ① フツコ調のデザイン
- ② カイコの通告
- ③ 候補者の名をレンコする
- ④ コジンを偲ぶ

(オ)

コンカン

5

- ① 事態をセイカンする
- ② カンセン道路
- ③ カンゲキを縫って進む
- ④ ザツカンを記す

(イ)

カヘイ

2

- ① 才能をカイカさせる
- ② 収入に応じたカゼイ
- ③ カンカしがたい事態
- ④ ヒヤツカテンの開店

(エ)

トジョウ

4

- ① トトウを組んで行動する
- ② 本音をトロする
- ③ 相手のキトを見破る
- ④ 通信がトゼツする

問2

傍線部A「人びとは、国内の移動とは異なる思いを抱いて、境界を越えざるをえない」とあるが、「国内の移動とは異なる思い」が生じるのはなぜだと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 国内の移動は、伝統社会のなかでごく自然なものとして行われてきたが、国境を越える移動は、社会の近代化にともない、人々の意思に反するようなかたちで生じてきたものだから。
- ② 国内の移動は、社会的な理由ではなく人間的な動機によってごく自然に行われていたが、国境を越える移動は、政治的であることはもちろん、経済的・社会的・文化的な意味をもっているから。
- ③ 国内の移動は、近代化のなかで日常的に行われてきたといえるが、国境を越える移動は、国家によって非日常的なものと見なされ、そこには国家が主権行為というかたちで介入してくるから。
- ④ 国内の移動は、近代社会において、例外的な出来事として容認されてきたが、国境を越える移動は、例外的な出来事としてさえ認められず、送出し国からも受入れ国からも厳しい規制を受けているから。

問3 傍線部B「輸送通信手段の発達が人の移動にどのような転換をもたらしてきたのか」とあるが、これについての説明

として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 輸送の手段が進化し、さまざまな情報も入手可能になったことで、移動する人間が増加し、その結果、かつては学問や研究の対象となっていなかった移動が、学問や研究における重要な対象となってきている。
- ② 地球の裏側にさえ容易に移動できるようになり、移動や移動後の生活についての情報も入手しやすくなって多くの移民が発生したが、そのことではかえって、個人が移動による恩恵を受けにくくなるという現象が生じている。
- ③ 大洋を越えた移動すら容易になり、生きるうえで必要な情報も簡単に手に入るようになって、空間というものに対する人びとの感覚や、人が移動するということの意味それ自体が大きく変容してきている。
- ④ 地理的感覚の隔たりは消失し、越境的な移動が日常化したのが、インターネットに代表される通信手段が移動後の生活に決定的な影響を及ぼすようになったことが、移動した人々に不安をもたらしている。

問4 傍線部C「国民国家」についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 近代の国民国家は、社会的矛盾や労働力不足を解消するために、ときには国民の組織的な移動を実行したが、その一方で、閉じられた空間としての国家を創りあげるために、国境を設定して国民の移動を管理しようとした。
- ② 近代の国民国家は、国家を完結したシステムとするために、国民の移動については厳しい管理を行い、産業資本の生産労働に従事する者の移動だけを認めることによって、自国の経済を堅持しようとした。
- ③ 近代の国民国家は、戦争や災害といった国家関係の展開や、諸国家による政策の歴史的な変動の影響を最小限にとどめて国家の自立性を保つために、土地の空間的な特徴を生かして確固とした国境を設定した。
- ④ 近代の国民国家は、国民の農村から都市への移動を容認してしまったことで大きく揺らぐことになり、そうした揺らぎを食い止めようとして、国民の越境的な移動に厳しく制限を加えようとしてきた。

問5 「移動」の「研究」について、筆者はどう考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 人の移動についての研究は、かつては移民研究というかたちをとっており、それは、移民を送り出す側の要請によって始まったにもかかわらず、移民を受け入れる側の都合に即して行われていた。しかし、現在では人の移動の形態は多様化しており、それについての研究は、現代世界の構造の変化を解明するうえで大切なものになってきている。
- ② 人の移動についての研究は、かつては国民国家の内部での移動に関するものに限定されており、それはきわめて作務的なものであった。しかし、現在では国境を越えた移動が一般化しており、そうした移動について研究することは、これまで自明とされてきた国民国家の揺らぎについて考察するうえで、重要な意味をもつものになっている。
- ③ 人の移動についての研究は、かつては移民研究という形態でなされており、ここでは、移民は一時的で例外的な存在と見なされていた。しかし現在では、国境を越えた人の移動はきわめて大規模なものになってきており、そうした移動の規模の大きさに着目することこそが、現代世界の構造の変化を解き明かすうえで最も重要である。
- ④ 人の移動についての研究は、かつては移民研究などが中心であり、それは、国民国家のあり方を自明のものとして、主に移民を受け入れる社会の立場から行われる作務的なものであった。しかし、現在では人の移動の形態は多様化しており、それについて研究することは、社会科学の諸分野における知の枠組みの更新につながる重要な行為となっている。

問6 この文章の表現と構成・展開について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① 第1段落冒頭の「グローバル化の時代と呼ばれる現代」という表現からは、過去の問題にはあえて言及せず、現代の移民問題に的を絞って考察を行おうとする筆者の姿勢がうかがえる。

② 第1段落の第2文の「これまで自明とされてきた」と、第4段落の第4文の「暗黙のうちに」は、密接に関係した表現であり、こうした表現にも筆者の問題意識が表れている。

③ 第3段落の最終文の「ひとたび国境が形成されると」という表現は、「国境」が人為的に作られるものだということを示唆した言い方である。

④ 第12段落の「共生」にカギカッコがつけられているのは、それが特定の立場から唱えられたスローガンのものだと、いうことを含意しているためだと考えることができる。

(ii) この文章の構成・展開に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

11。

① 第1段落では「多様化してきた移動の諸形態」ということが述べられており、その内容は、とくに第8段落や第10段落で具体的に紹介されている。

② 第2～7段落では主に「近代」的なあり方についての説明がなされており、第8段落以降ではそれを踏まえ、「近代」的なあり方とは異なるところのある「現代」の状況が説明されている。

③ 第13段落ではグローバル化した現代の状況が説明されているが、続く第14段落では、世界がふたたびグローバル化以前の状況に戻ろうとする傾向を見せているということが示唆されている。

④ 最終段落の内容は、第1段落の内容と呼応し合っており、そのことによって、筆者の問題意識やこの文章の主題が明確になっている。

第2問

次の文章は、一九四二年（昭和一七年）に発表された織田作之助おださくのすけの小説「秋深き」の一節である。肺を病んで医師から転地療養を勧められた「私」は温泉にやってきたが、その旅館で、隣室に泊まっていた夫婦と知り合いになった。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。（配点 45）

翌朝、散歩していると、いきなり背後うしろから呼びとめられた。

振り向くと隣室となりの女がひとりで大股にやって来るのだった。近づいた途端、妙に熱っぽい体臭がぶんと匂った。

「お散歩ですか？」

女はひそめた声で訊きいた。そして私の返事を待たず、

「御一緒に歩けません？」

迷惑に思ったが、まさか断るわけにはいかなかった。

並んで歩きだすと、女は、あの男をどう思うかといきなり訊たずねた。

「どう思うって、べつに……。そんなことは……」

5
答えようもなかったし、また、答えたくもなかった。自分の恋人や、夫についての感想をひとに求める女ほど、私にとってきらいなものはまたと無いのである。露骨ろこつにいやな顔をしてみせた。

10
女はすかされたように、立ち止まって暫しばらく空を見ていたが、やがてまた歩きだした。

「貴方おうちのような鋭い方は、あの人の欠点けってんくらいすぐ見抜ける筈はずでっけど……」

どこを以もって鋭いというのかと、あきれていると、女は続けて、さまざま男の欠点をあげた。

15
「……教養きやうなんか、ちょっともあれしませんの。これが私の夫ですというて、ひとに紹介せうかいも出来できしませんわ。字ひとつ書かしても、そもそも情けないくらいですわ。ちょっとも知性ちせいが感じられしませんの。ほんまに、男の方かたで、筆蹟ひつせきをみたらいっぺんにその人がわかりますのねえ」

私はむかむかッとして来た、筆蹟くらいで、人間の値打ちがわかってたまるものか、近頃の女はなぜこんな風に、なにかと言えど教養だとか、筆蹟だとか、知性だとか、月並みな符号を使って人を批評したがるのかと、うんざりした。

「奥さんは字がお上手なんですね」

20 しかし、その皮肉が通じたかどうか、顔色も声の調子も変えなかった。じつと前方を見凝めたまま相変らず固い口調で、

「いいえ、上手と違いますわ。この頃は気持が乱れていますのんか、お手が下ったて、お習字の先生に叱られてばかりして
ますんです。ほんまに良い字を書くのは、むつかしいですわね。貴方なんか、きつとお習字上手やと思いますわ。お上手なん
でしょう？ いっぺん見せていただきたいわ」

「僕は字なんかいっぺんも習ったことはありません。下手糞です。下品な字しか書けません」

25 しかし、女は気にもとめず、

「私、お花も好きですのん。お習字もよろしいですけど、お花も気持が浄められてよろしいですわ。——私あんな教養のない
人と一緒になって、^①ほんまに不幸な女でしょう？ そやから、お習字やお花をして、慰めるより仕方ありません。ところが、
あの人はお習字やお花の趣味はちょっともあれしませんの——ところで、話がありますけど、貴方キネマスター（注1）で誰がお好き
ですか？」

30 「……………」

「私、絹代が好きです。一夫はあんまり好きやあれしません。あの人は高瀬が好きや言いますのんです」

「はあ、そうですか」

絹代とは田中絹代、一夫とは長谷川一夫だとうやうわかったが、高瀬とは高瀬なにがしかと考えていると、

「貴方は誰ですか？」

A 「高瀬です」

つい言った。

「まあ」

さすがに暫らくあきれていたようだったが、やがて、

40 「高瀬はまあええとして、あの人はまた、○○○が好きや言うんです。私、あんな下品な女優大きらいです。ほんまに、あの
人みたいな教養のない人知りませんわ」

私はその「教養」という言葉に辟易した。うじゃうじゃと、虫が背中を這うようだった。

45 「ほんまに私は不幸な女やと思いますわ」

朝の陽が蒼黝い女の皮膚に映えて、鼻の両脇の脂肪を温めていた。

ちらとそれを見た途端、なぜだか私はむしろ女があわれに思えた。かりに女が不幸だとしても、それはいわゆる男の教養だけの問題ではあるまいと思った。

「何べん解消しようと思ったかも分れしまへん」

解消という言葉が妙にどぎつく聴こえた。

50 「それを言いだすと、あの人はすぐ泣きだしてしても、私の機嫌とるのんですわ。私がヒステリー起こした時は、ご飯かて、
たいてくれます。洗濯かて、せえ言うたら、してくれます。ほんまによう機嫌とります。けど、あんまり機嫌とられると、いや
ですねん。なんやこう、むく犬の尾が顔にあたってみたいで、気色が変わるうてわるうてかありませんのですわ。それに、えらい
焼餅やきですの。私も嫉妬しますけど、あの人の、もってえげつないんです」

顔の筋肉一つ動かさずに言った。

妙な夫婦もあるものだ。こんな夫婦の子供はどんな風に育てられているのだろうと、思ったので、

「お子さんおありなんでしょう？」

55 と、訊くと、

「子供はあれしませんの。それで、こうやってこの温泉へ来てるんです。この温泉にはいると、子供が出来るて聞きました

ので……」

あっ、と思った。なにが解消なもんかと、なにが莫迦にされているような気がした。

いつか狭霧が晴れ、川音が陽の光をふるわせて、伝わって来た。女のいかつい肩に陽の光がしきりに降り注いだ。突然女は立ちすくんだ。

見ると隣室の男が橋を渡って来るのだった。向うでも見つけた。そして、いきなりくりりと身をひるがえして、逃げるように立ち去ってしまった。ひどくこせこせした歩き方だった。それがなにかあわれだった。

女は眼を、ぱちぱちと痙攣させた。唇をぎゅっと歪めた。狼狽をかくそうとするさまがありありと見えた。それを見ると、私もまた、なんとということもなしに狼狽した。

やがて女は帯の間へさしこんでいた手を抜いて、不意に私の肩を柔かく敲いた。

「私を尾行しているのですね。いつもああなんです。なにしろ、嫉妬深い男ですよって」

女はにこりともせずになんかそう言うので、ぎろりと眼をあげて穴のあくほど私を見凝めた。

私は女より一足先に宿に帰り、湯殿へ行った。すると、いつの間にか帰っていたのか、隣室の男がさきに湯殿にはいついた。ごろりとタイルの上に仰向けに寝そべっていたが、私の顔を見ると、やあ、と妙に威勢のある声とともに立ち上った。そして、私のあとから湯槽へはいつて来て、

「ひよっとしたら、ここへ来やはるやろ思てました」

と、ひどく真面目な表情で言った。それでは、ここで私を待ち伏せていたのかと、返事の仕様もなく、湯のなかでふわりふわりからだを浮かせていると、いきなり腕を掴まれた。

「彼女はなんぞ僕の悪ぐち言つてましたやろ？」

案外にきつい口調だった。けれど、彼女という言い方にはなにか軽薄な調子があった。

「いや、べつに……」

「嘘言いなはれ。隠したかてあきまへんぜ。僕のことでなんぞ聴きはりましたやろ。違いまっか。僕のにらんだ眼にくるいはおまっか。どないだす？ 聴きはれしめへんか。隠さんと言っとくくなはれ」

B ねちねちとからんで来た。

80 私は黙っていた。しかし、男は私の顔を覗きこんで、ひとりうなずいた。

「黙ったはるとこ見ると、やっぱり聴きはったんやな。——なんぞ僕のわるいことを聴きはったんやろ。しかし、言うときまつけどね。彼女の言うことを信用したらあきまへんぜ。あの女子は嘘つきですよってな。わてはだまされた、わては不幸な女子や、とこないひとに言いふらすのが彼女の癖でんねん。それが彼女の手工でんねん。そない言うてからに、うまいこと相手の同情ひきよまんねんぜ。ほんまにあんた、警戒せなあきまへんぜ」

85 警戒とは大袈裟な言い方だと、私はいささかあきれた。

「ところで、彼女は僕のこと如何言うとりました？ 悪い男や言うとりましたやろ？ 焼餅やきや言うてしまへんでしたか。どうせそんなことでっしゃろ。なにが、僕が焼餅やきますかいな。彼女の方が余っ程焼餅やきでせ。一緒に道歩いてても、僕に女子の顔見たらいかん、こない言いよりまんねん。活動見ても、綺麗な女優が出て来たら、眼工つぶつとれ、とこない言いよりまんねん。どだい無茶ですがな。ほんまにあんな女子にかかったら、一生の損でせ。そない思いはれしまへんか」

90 その時、脱衣場の戸ががらりとあいた。

「あ、来りました」

男はそう私の耳に囁いて、あと、一言も口を利かなかった。

部屋に戻って、案外あの夫婦者はお互い熱心に愛し合っているのではないか、などと考えていると、湯殿から帰って来た二人は口論をやり出した。

95 襖越しにきくと、どうやら私と女が並んで歩いたことを問題にしているらしく、そんなことで夫婦喧嘩されるのは、随分迷惑な話だと、うんざりした。

夕飯が済んだあと、男はひとりで何処かへ出掛けて行ったらしかった。私は療養書の注意を守って、食後の安静に、畳の上に寝そべっていた。

虫の声がかきこえて来た。背中までしみ透るように澄んだ声だった。

すっと、衣ずれの音がして、襖がひらいた。熱っぽい体臭を感じて、私はびっくりして飛び上った。隣室の女がはいつて来たのだった。

「お邪魔やありません？」

襖の傍に突ったまま、言った。

「はあ、いいえ」

私はきよんとして坐っていた。

女はいきなり私の前へべったりと坐った。膝を突かれたように思った。この女は近視だろうか、それとも、距離の感覚がまるでないのだろうか、なんとなく迷惑していると、

「いま、ちょっと出掛けて行きましたの」

その隙に話しに来た、——そんなことをされては困ると思った。私はむつかしい顔をした。

女はでかい溜息をつき、

「あの男にはほんまに困ってしまいます」

と、言つて分厚い唇をぎゅっと歪めた。

「——あの女、なんぞ私のこと言いましたか。どうせ私の悪ぐち言うたことやと思います。それがあの女の癖なんです。誰にでも私の悪ぐちを言つてまわるのです。なんせ肚の黒い男ですよって、なにを言うか分れしません。けど、あんな男の言うこと信用せんといて下さい。何を言つても良え加減にきいといて下さい」

「いや、誰のいうことも僕は信用しません」

全く、私は女の言うことも男の言うことも、てんで身を入れてきかない覚悟をきめていた。「それをきいて安心しました」

女は私の言葉をなんときいたのか、生真面目な顔で言った。

「ほんまに、あの人くらい下劣な人はあれしませんわ」

「そうですね。そんな下劣な人ですかね。よい人のようじゃありませんか」

その気もなく言うと、突然女が涙をためたので驚いた。

「貴方にはなにも分けしませんのですわ。◎ほんまに私は不幸な女ですわ」

うるんだ眼で恨めしそうに私をにらんだ。視線があらぬ方へそれている。それですます恨めしそうだった。

私は答えようもなく、いかにも芸のなさそうな顔をして、黙っていた。

すると、女の唇が不気味にふるえた。そして大粒の泪が蒼黝い皮膚を汚して落ちて来た。ほんとうに泣き出してしまったのだ。

私は頗る閉口した。どういう風に慰めるべきか、ほとほと思案に余った。

翌朝、夫婦はその温泉を発った。私は駅まで送って行った。

「へえ、へえ、もう、これぐらい滞在なすつたら、ずっと効目はござりやんす」

駅のプラットホームで客引きが男に言っていた。子供のことを言っているのだな、と私は思った。

「そやろか」

男は眼鏡を突きあげながら、言った。そして、売店で買物かいものをしていた女の方むかに向って、

「糸枝！」

と、名をよんだ。

「はい」

女が来ると、

「もう直じぎ、汽車が来るよって、いまのうち挨拶あいさつさせて貰もらい」
「はい」

女はいきなりシヨールをとって、長つたらしい挨拶を私にした。終ると、男も同じように、糞丁寧な挨拶をした。私はなにか夫婦の営みの根強さというものをふと感じた。

汽車が来た。

汽車が動きだした。

男の声は莫迦莫迦しいほど、大きかった。

女は袂たもとの端を掴み、新派(注3)の女優めいた恰好かっこうで、ハンカチを振った。似合いの夫婦に見えた。

(注) 1 キネマスター——映画スター。「キネマ」は映画のこと。

2 活動——映画のこと。「活動写真」の略。

3 新派——明治中期、旧派である歌舞伎に対して創始された演劇。

問1 傍線部A「『高瀬です』つい言った。」とあるが、ここでの「私」についての説明として最も適当なものを、次の①～

④のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① お習字やお花が好きだななどと言って自分の上品さをことさらに主張しようとする「女」に対し、あえて自分は品のないものが好きなふりをするので、「女」から距離を置こうとしている。
- ② 教養だの知性だの筆蹟だのといった月並みな言葉で空論を振りかざす「女」にうんざりしてしまい、あえて自分が知性のないふりをするので、「女」に反省を促そうとしている。
- ③ 皮肉を言っても顔色も声の調子も変えないような「女」の態度に驚きあきれてしまい、どうにかして彼女の反応を変えてみたいと考え、より直截ちよくせつなかたちで嫌味な言葉を吐いている。
- ④ こちらの気分を逆撫さかなでするかのようなことを次から次へと話してくる「女」の態度に気障りなものを感じるあまり、その「女」の嫌がりそうなことを思わず口にしてしまっている。

問2

波線部④「ほんまに不幸な女でしょう?」、⑤「ほんまに私は不幸な女やと思いますわ」、⑥「ほんまに私は不幸な女ですわ」とあるが、こうした「女」の言葉を、「男」と「私」はそれぞれどう受けとめているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 「男」に言わせれば、こうした言葉は他人に情けをかけてもらおうとする「女」の手練手管であるが、「私」は、基本的にはこうした言葉を真に受けようとは思っていない。
- ② 「男」の方は、こうした言葉を「女」の一時的な不満の表れとしか見ようとしていないが、「私」の方は、こうした言葉を「女」の本心の表れなのだろうと考えている。
- ③ 「男」は、「女」がこうした言葉を言うのは自分の方にそれなりの原因があるからだと考えているが、「私」は、その原因は「男」以外のところにあるのだろうと思っている。
- ④ 「男」によれば、こうした言葉は他人からの同情をひくための「女」の嘘にすぎないが、「私」は、こうした言葉のなかに「女」の優しさやけなげさを見出みいだそうとしている。

問3 傍線部B「ねちねちとからんで来た。」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選

べ。解答番号は 14。

- ① 「私」が嘘をついているのではないかという疑いを拭いきれずにいる「男」は、「私」がいくら真摯に答えても、あれこれと問いただすことをやめようとしなかった。
- ② 妻について疑心暗鬼にかられているようなところのある「男」は、「私」に対し、何か知っていることがあるのではないかとしつこくつきまとうように尋ねてきた。
- ③ 得体の知れない夫婦のことにこれ以上かかわりたくないと考えている「私」は、知っていることにもあえて口を噤んでいたが、「男」はそうした「私」の嘘を見抜いて非難してきた。
- ④ 妻が自分を嫌っているかもしれないと考えている「男」は、「私」もそうした妻にそそのかされて自分に対する悪ぐちを言っているのではないかと疑い、「私」にあれこれと質問してきた。

問4

傍線部C「翌朝、夫婦はその温泉を発^たった。私は駅まで送って行った。」とあるが、夫婦のことを見送る「私」についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 相手のことを互いに非難し合うなどして「私」に不快な思いをさせた夫と妻も、結局のところは似合いの夫婦であるように見えたが、そんな夫婦でも欲していた子供には恵まれていないようであり、そうした事情を知った「私」は、人生のはかなさや空^{むな}しさといったことを考えざるをえず、複雑な思いにとらわれている。
- ② 夫婦が子宝を授かるために温泉にやってきたことを知った「私」は、二人に対してそれなりに同情の念を抱くようになってはいたが、彼らの長つたらしい挨拶や夫の莫迦莫迦しいほどの大きな声を聞いているうちに、すべてがくだらないことであるようにも感じられ、旅館での出来事を思い出して苦々しい気分になっている。
- ③ どこか常識をわきまえないところのある夫と妻の振る舞いにうんざりしてしまった「私」は、夫婦に何らかの忠告でもしてやろうと思っていたが、そんな「私」も、人の介入をもともしないような夫婦の営みの根強さを目の当たりにして、二人を似合いの夫婦だと感じ、どことなくほのぼのしたような気分になえている。
- ④ 互いに大袈裟な物言いで相手の悪ぐちを言う夫と妻に付き合わされ、その不躰^{ぶしつけ}な態度に不快も覚えた「私」だが、そんな「私」は、二人が似たもの夫婦とでも呼べそうな存在であり、それなりに気持ちを通じ合わせているのかもしれないとあらためて感じ、夫婦というものの不思議なありようといったことに思いをめぐらせている。

問5

本文に描かれた「私」の人物像を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 自分の世界を大切にしているため、人から意見を言われることは基本的に好まないが、相手に強く出られると、何も答えられず卑屈になってしまうようなところももっている。
- ② 表面上は我が道を行くといった生き方をしているように見えるが、実は人情に厚く、困っている人に対してはつい手を差し伸べてしまうようなところのある人物である。
- ③ 世間の風潮といったものからは距離を置くようなところがあり、他人が自分のなかに立ち入ってくることも好まないが、周囲のことを冷静な眼で見つめるという面ももっている。
- ④ 他人に合わせることなく我が道を行こうとしているが、意志の弱さのために周囲に巻き込まれることが多く、結局は屈託した日々を送らざるをえないようなところのある人物である。

問6

本文中の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 20行目の「顔色も声の調子も変えなかった」や、24行目の「視線があらぬ方へそれている」などの描写は、「私」から見て「女」が得体の知れないところをもつ存在だということを暗に示したものだといえる。
- ② 50行目では、「女」につきまとう「男」の様子が「むく犬の尾が顔にあたったみたい」と擬人法を用いて表現されているが、この描写によって、「男」のことを気味悪がっている「女」の姿が鮮やかに浮かびあがってくる。
- ③ 72・73行目の「ふわりふわりからだを浮かせている」という表現は、療養のためとはいえ定職にも就かず無為な日々を送らざるをえなくなっている「私」の姿を、印象づけるために用いられたものである。
- ④ 133行目にある「男」の「糸枝！」という言葉には「！」が使われているが、このことから、「男」の声が大きいということだけでなく、「男」が「女」に対してつねに高圧的な態度をとっているということもうかがえる。

問7 本文についての批評や感想を述べたものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

- ① 独特のユーモアを交えながらも、温泉宿に逗留^{とくりゆう}していた「女」とその夫、そしてその二人と偶然に出会った「私」の内面を、それぞれの視点から丁寧^{ていねい}に描き出しているといえる。
- ② 旅先で出会った「女」に違和感を覚えながらも、次第に彼女に心惹^ひかれていき、そうした自分の気持ちをもてあまして苦悩している「私」の姿が、会話などを通して浮かびあがってくる仕組みになっている。
- ③ 温泉宿で無為な日々を過ごすことしかできずにいる「私」は、そうした自分の心情を「女」に投影しているが、そんな「私」のありようをさりげなく描いている点に、この作品の独特な趣がある。
- ④ 登場人物である「女」の奇妙な振る舞いが印象に残るが、その「女」に振り回されている「私」の姿を描いているところに、この作品の面白さがあるといえることができる。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

sample

第1回

2027
共通テスト
直前対策問題集

第1回

国語

200点／90分

第3問 A高校に通うアユミさんは、ボランティアについて調べ、「ボランティアとは何か」という題で自分の考えを【レポート】にまとめた。【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】は、【レポート】に引用するために新聞記事やアンケート結果、参考文献の一部を、見出しを付けて整理したものである。これらを読んで、後の問い（問1～4）に答えよ。（配点 20）

【レポート】

近年普通に行われるようになったかに思えるボランティアだが、それはどのようなものであり、またどのようなものであるべきなのか。【資料Ⅱの3】を見ると、2004年までは、ボランティア活動がさかんに行われてきたかのように見える。しかし【資料Ⅱ】の三つの図表を見る限り、日本の高校生で実際にボランティアに参加した経験のある人数は、他の国と比べて多いとは言えないと推測され、高校生のボランティア活動に対する意識は低いと考えられる。これは、日本の若者には

X という傾向があり、それがボランティアへの意識が低いということの要因となつていふと考えられる。

だからといって【資料Ⅰ】にあるように、**Y** というあり方が、ボランティアの本来の姿だと考えるのは、ボランティア活動の意味を失わせる可能性がある。

【資料Ⅲ】にあるように、ボランティアは**Z** と考えられるべきであるとするならば、そうしたことを自覚し、それを実践していくためには、私たちがボランティアとは何かを真剣に考えるとともに、個人的にも社会的にも、ボランティアが行える環境を、具体的にどのような作つていくべきかを模索する必要があると思われる。

【資料Ⅰ】 A 高校新聞より

1995年の阪神淡路大震災以降、災害における民間の救援活動・復興活動は行政を超える活躍を見せている。

行政は「公平」を基本とするために、「全体」の状況の把握に迫われ、震災のような非常時においては、対応がどうしても遅れてしまうことが多い。むしろ、「公平」さよりも、目の前の出来事に集中できるボランティアの方が迅速で機動的な対応ができる。そして大きな災害をきっかけとして、市民によるボランティア活動は新たな「公共」のための活動として評価されるようになったのである。

1998年には「特定非営利活動促進法(NPO法)」が制定されてボランティア活動がしやすくなると同時に、市民や活動団体が法人格を得て多くの市民NPO組織が新たに誕生することとなった。

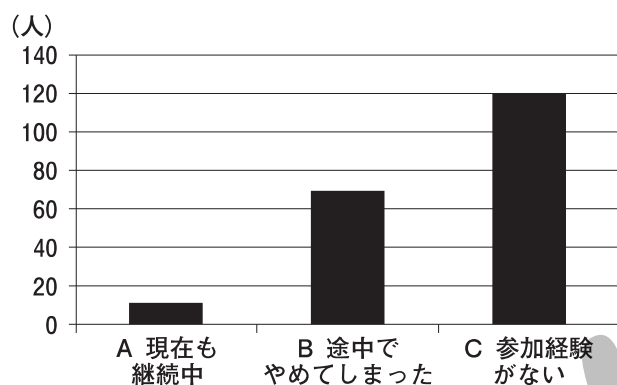
また、中央教育審議会が「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」という答申を出しており、ボランティア活動などさまざまな体験活動を通じて「他人に共感すること、自分が大切な存在であること、社会の一員であることを実感し、思いやりの心や規範意識をはぐくむことができる。また、広く物事への関心を高め、問題を発見したり、困難に挑戦し解決したり、人との信頼関係を築いて共に物事を進めていく喜びや充実感を体得し、指導力やコミュニケーション能力をはぐくむとともに、学ぶ意欲や思考力、判断力などを総合的に高め、生きて働く学力を向上させることができる」と、ボランティア活動の意義を強調している。

そして、「学校や地域において青少年に対し意図的、計画的に『奉仕活動』をはじめ多様な体験活動の機会の

充実を図」ることの必要性を説いている。

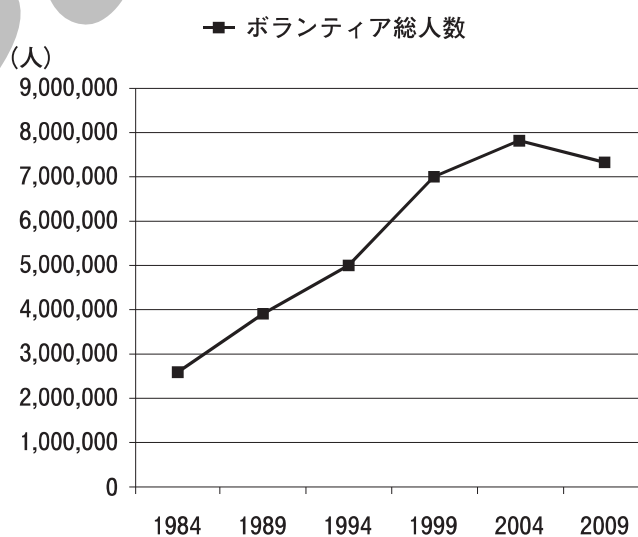
このように、近年、青少年のボランティア活動をはじめ、さまざまな体験活動の積極的な推進が提言されており、各学校でそれぞれの地域の状況に即した取り組みが行われている。

高校生のボランティア活動の取り組み状況
A 高生200人を対象に行ったアンケート調査結果



望ましい生き方 (高校生)	
1. 自分の生活のことよりも、まず社会のことを考える	22.1%
2. 社会のことを考える前に、まず自分の生活を大切にする	73.2%
3. どちらともいえない、わからない、無回答	4.7%
生活目標 (高校生)	
1. その日その日を、自由に楽しく過ごす	37.5%
2. しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く	17.4%
3. 身近な人たちと、なごやかな毎を送る	41.1%
4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする	3.8%
5. その他	0.0%
6. わからない、無回答	0.2%

(出典：NHK「中学生・高校生の生活と意識調査・2012年」による)



(出典：全国社会福祉協議会調べ 2009年)

【資料Ⅱの1】

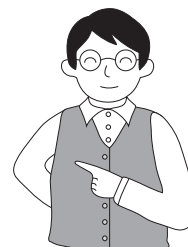
【資料Ⅱの2】

【資料Ⅱの3】

【資料Ⅲ】 **ボランティアを知ろう！**

ボランティアをはじめたいと思うきっかけは人それぞれ。ボランティアは自分の関心のあるテーマ、自分にできることから始められるとても身近な活動です。

ボランティア活動は、地域や社会をよりよくしていくことに役立つとともに、活動する自分自身も豊かにしてくれる力を持っています。



■自分の意志で行う

ボランティア活動は、誰かに強制されたり、義務で行ったりするものではなく、自分の考えで参加したり、取り組むものです。

だからこそ、多様な問題に柔軟に取り組むことができ、人の心に働きかける力を持っています。

■自分のためでない

ボランティア活動は他の人や社会のために取り組むもので、お金をもらうことや自分だけが満足することを目的とはしていません。活動を通じて結果的に、活動する自分自身もさまざまなものを得ることができます。

■さまざまなことが得られる

たとえば、活動を通して、感動や喜び、充実感、達成感などが得られたり、活動そのものが楽しみになることがあります。

また、ボランティア活動を通じてさまざまな体験をしたり、人や社会、自分について新しく気づくことがあったり、知識や技術を学ぶこともできます。さまざまな人たちと知り合ったり、協力しあったりすることで、人とのつながりを広げることもできます。

■すでにある仕組みや発想を超えられる

ボランティア活動は自由な意志で取り組むものですので、すでにある仕組みや発想にとらわれずに、何が必要とされるかを考えて実施することができる活動です。

そうした取り組みが、新しいサービスや社会の仕組みを生み出すことにつながることもある創造的な活動なのです。

(地域福祉・ボランティア情報ネットワーク(全国社会福祉協議会地域福祉部／全国ボランティア・市民活動振興センター)関係資料などより作成)

問1 【レポート】の空欄 **X** には、【資料Ⅱ】の三つの図表についての説明が入る。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **21**。

- ① 社会をよくすることより自分の安楽な生活を優先するという意識が強い
- ② 友だちとのつきあいを第一に考え、外部の出来事に対する関心が低い
- ③ 自由という価値を絶対化し、それが脅かされるのを嫌忌する傾向が強い
- ④ 生活自体が幸福や楽しみと結びつくものではないという意識が強い

問2 【レポート】の空欄 **Y** には、【資料Ⅰ】の内容をまとめたものが入る。そのまとめとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **22**。

- ① 一刻を争う現実の災害を学習の機会として利用しよう
- ② 自分の眼前のことだけに集中し、全体を見ようとしな
- ③ 社会が青少年に、ある意味強制的に行わせようとする
- ④ 政府や公共の機関が自らの職務を民間に依存してしまう

問3 【レポート】の空欄 Z には、【資料Ⅲ】の内容と関連するものが入る。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 自分のしたいことだけをし、したくないことは無理してしないものだ
- ② 他人のためにするものであると同時に、自分のためにもなるものだ
- ③ 自分が他人を助けているという自尊心を自らが感じるために行うものだ
- ④ 他人に力を貸し感謝を受け取るといふ誰でもができることなのだ

問4 アユミさんは、「レポート」の主張をより理解してもらうためには論拠や資料が不十分であることに気づき、補足しようと考えた。その内容として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

24

 ・

25

。

① 【レポート】の最後の「ボランティアが行える環境を、具体的にどのように作っていくべきかを模索する」という表現は抽象的であると考え、自分が思いついた「こうであつたらよい」と思う環境の具体例を補足しようと考えた。

② 【資料Ⅱの1】を提示しているが、A高校のボランティアに参加していない生徒に対する調査が不十分であると思い、彼らがボランティアに参加しない理由を調べ、その資料を補足しようと考えた。

③ 【レポート】に「他の国と比べて多いとは言えない」と書いたが、他国の若者のボランティア活動の状況がわかるように、他国と日本のボランティア活動への参加人数の推移を比較できるグラフを補足しようと考えた。

④ 【資料Ⅰ】に中央教育審議会の答申が引用されている新聞を用いたことで、【レポート】の中立性が疑われると思い、政治的偏向のないことを示すため、中央教育審議会に関する注記を補足しようと考えた。

⑤ 現代では、自分が他人にどのように思われているかを気にし、人から認められたいと思う人が多いことがボランティアを行う動機になっている可能性があると考え、そうしたことがわかる資料を補足しようと考えた。

⑥ 【資料Ⅱの3】では、2004年からボランティアの人数が低下しているが、その原因が不明だと、【資料】自体の信頼性が疑われると思い、2004年からの低下の原因を示す資料を補足しようと考えた。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

sample

2027
共通テスト
直前対策問題集

第3回

第3回

国語

200点／90分

第4問

次の【文章Ⅰ】は、平安時代末期から鎌倉時代初期の頃に成立した『古本説話集』の一節で、平安時代前期の歌人平貞文（本文では「平中」）に関する逸話である。【文章Ⅱ】は、平安時代中期に成立した『源氏物語』の一節で、主人公の光源氏が幼かった頃の紫の上（本文では「姫君」）と一緒に絵を描く場面である。これらを読んで、後の問い（問1～3）に答えよ。なお、設問の都合で【文章Ⅰ】の本文の段落に①・②の番号を付してある。（配点 45）

【文章Ⅰ】

① 今は昔、平中といふ色好みの、いみじく思ふ女の若くうつくしかりけるを、妻の許に率て来て置きたり。妻、にくげなる事どもを言ひつづくるに、追ひ出だしけり。この妻に従ひて、「いみじうらうたし」とは思ひながら、え止めず。いちはやく言ひければ、近くだにもえ寄らで、四尺の屏風に押しかかりて立てり。「世の中の思ひのほかにてあること。いかにしてもやし給ふとも、忘れて消息もし給へ。おのれもさなむ思ふに」など言ひけり。この女は包みなどに物入れたためて、車とりによりて待つほどなり。「いとあはれ」と思ひけり。さて出でにけり。とばかりありておこせたる、

a 忘らるな忘れやしめる春霞けさ立ちながら契りつること

② この平中、さしも心に入らぬ女の許にても、泣かれぬ音を、そら泣きをし、涙に濡らさむ料に、硯瓶に水を入れて緒をつけ、肘に懸けてし歩きつ、顔、袖を濡らしけり。出居の方を、妻、のぞきて見れば、問木に物をさし置きけるを、出でて後、取り下ろして見れば、硯瓶なり。また、畳紙に丁子入りたり。瓶の水をいうてて、墨を濃くすりて入れつ。鼠の物をとり集めて丁子に入れ替へつ。さてもとの様に置きつ。例の事なれば、夕ざりは出でぬ。暁に帰りて、心地悪しげにて唾を吐き、臥したり。b 畳紙の物の故なめり」と妻は聞き臥したり。夜明けて見れば、袖に墨ゆゆしげにつきたり。鏡を見れば、顔も真黒に、目のみきらめきて、我ながらいと恐ろしげなり。硯瓶を見れば、墨をすりて入れたたり。畳紙に鼠の物入りたり。いといとあさましく心憂くて、その後、そら泣きの涙、丁子を含むこと、止めてけるとぞ。

- (注)
- 1 四尺の屏風——「四尺」は約一二センチメートル。「屏風」は室内に立てて、物を隔てたり、風を防いだりする家具。
 - 2 硯瓶——硯に注ぐ水を入れる器。
 - 3 つ——ここでは、接続助詞「て」と同じ意味。
 - 4 出居——客間。客との応接に使用する部屋。
 - 5 間木——高い所に設置された棚。
 - 6 畳紙——紙を折り畳んだもので、貴族たちはこれを懐に入れて携帯する。
 - 7 丁子——フトモモ科の常緑樹で娯薬の一種。口臭消しとして口に含んだ。
 - 8 いうてて——注ぎ捨てて。
 - 9 鼠の物——ここでは、鼠の糞のこと。

【文章Ⅱ】

絵など描きて色どりに給ふ。よろづにをかしうさび散らし給ひけり。我も描き添へ給ふ。髪いと長き女を描き給ひて、鼻に紅をつけて見給ふに、絵に描きても見まうきさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いと清らなるを見給ひて、手づからこの紅花を描きつけ、にははして見給ふに、かくよき顔だに、さて混じれらむは見苦しかるべかりけり。姫君、見ていみじく笑ひ給ふ。「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、「ウうたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむとあやふく思ひ給へり。そら拭ひをして、」さらにごそ白まね。用なきさびわざなりや。内裏にいかのたまはむとすらむ」と、いとまめやかにのたまふを、いといとほしと思して、寄りて拭ひ給へば、「平中がやうに色どりに添へ給ふな。赤からむはあへなむ」と戯れ給ふさま、いとをかしき妹背と見え給へり。

- (注)
- 10 紅花——紅花からとった染料で絵具にも用いる。「赤鼻」と掛けている。
 - 11 内裏——ここでは、帝のこと。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

26
28

(ア) いみじうらうたし

- 26
- ① たいそう美しい
 - ② とてもいじらしい
 - ③ 不快で苛立いらだたしい
 - ④ ひどくみじめだ

(イ) 心憂うれくて

- 27
- ① 悲しくて
 - ② 憂鬱ううつになって
 - ③ 情けなくて
 - ④ 悔くしくて

(ウ) うたてこそあらめ

- 28
- ① いやだろう
 - ② どうにでもなれ
 - ③ 笑われそうだ
 - ④ 疑うわしい

Sample

問2 波線部 a ～ e について、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

号は 29。

- ① a 「忘らるな」の「な」は詠嘆の終助詞で、若い女が平中に捨てられた自分の身の上を嘆いていることを表している。
- ② b 「畳紙の物の故なめり」の「な」は推定の助動詞で、平中の苦しむ声を聞いて、その原因を妻が推測する様子を表している。
- ③ c 「さて混じれらむ」の「らむ」は現在推量の助動詞で、源氏が今まさに赤い色の付いた自分の鼻を見ている様子を表している。
- ④ d 「思ひ給へり」の「給へ」は下二段活用の謙讓の補助動詞で、作者から源氏に対する敬意を表している。
- ⑤ e 「さらにこそ白まね」の「ね」は打消の助動詞で、鼻に付いた色がまったく取れないと源氏が大げさに言ったことを表している。

問3 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教師——どちらの文章にも登場する平中というのは色好みで有名な男性ですが、平中についてより深く理解するために、次の文章を読んでみましょう。これは平安時代末期に書かれた『源氏積』という『源氏物語』の注釈書の一節で、【文章Ⅱ】について記しています。女君とあるのは若い頃の紫の上のことです。

女君に、鼻に紅つけて見する所に、御硯の瓶の水に紙を濡らして拭ひ給ひて、平中がやうに色どり添へ給ふ所、平中が見る女ごとに泣くよし見せむとて、硯の瓶に水を入れて目を濡らしけるを、女、心得て、その瓶に墨を入れたりけるを、知らで例のやうに顔にして帰りたるを見て、
我にこそつらさを君はみすれども人にすみつく顔のけしきよ

教師——『源氏積』の内容は、【文章Ⅰ】の②段落に対応しています。『古本説話集』も『源氏積』も『源氏物語』以降の成立ですが、平中に関する話が『源氏物語』の書かれた時には広く流布していたのでしょうか。

生徒A——ですが、『源氏積』と【文章Ⅰ】の②段落とは違う点もありますよ。例えば「我にこそ」の和歌は『古本説話集』にはありません。ところでこの和歌はどんな意味なのでしょうか。

教師——前に授業で取り上げた「掛詞」に注目してみるとよいですよ。

生徒B——掛詞は一つの言葉に二つの意味を持たせる技法でしたよね。そうか、この和歌は、**X**を詠んでいると考え

られます。

教師——その解釈でよいでしょう。内容から見ても、【文章Ⅰ】の結末にあってもおかしくない和歌なので、何らかの理由で脱落したものと思われる。

生徒C——今、思い出したのですが、以前、どこかで【文章Ⅰ】の①段落の話を読んだ気がします。

教師——よく勉強していますね。たしかに、歌物語の『大和物語』^{やまと}には【文章Ⅰ】の①段落の内容だけが載っています。では、②段落があることで【文章Ⅰ】で描かれている内容は、どのようになりますか。

生徒D——そうか、②段落があることで、【Y】^Yと言えるのではないのでしょうか。

生徒E——そうすると、当時流布していた平中の逸話を前提として書かれた【文章Ⅱ】の「平中がやうに色どり添へ給ふな。赤からむはあへなむ」は、【Z】^Zということですね。

教師——そうです。当時の読者たちは、他の作品の引用があることによって、物語の場面や心情をより深く理解していたのでしょね。

(i) 空欄 **X** に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **30**。

- ① 「けしき」に「怪しき」と「気色」を掛けて、あなたが浮気をしているのではないかと怪しんでいたが、それが態度にもはつきり表れたと、平中に腹を立てる気持ち
- ② 「すみつく」に「住み着く」と「墨付く」を掛けて、他の女の所に通っていることが墨の付いたあなたの顔でよくわかったと、浮気な平中を嘲る気持ち
- ③ 「けしき」に「異しき」と「気色」を掛けて、帰宅した様子がいつもとまったく違っていたことで他の女に情を移したのがわかったと、平中の心変わりを嘆く気持ち
- ④ 「すみつく」に「澄み尽く」と「墨付く」を掛けて、どんなにすました顔をしていても墨を付けたあなたの顔から浮気は明らかだと、平中を責める気持ち

(ii) 空欄 Y に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① ①では平中と恋人を怒りにまかせて追い出すだけの妻だが、②では浮気な夫に恥をかかせて世間の笑いものにするために策をめぐらす、悪賢い人間性が描かれている
- ② ①では平中の妻によって追い出される恋人に、②では平中の浮気に腹を立てて夫を問い詰める妻に焦点を当てるところで、立場の違う女性のありようが描かれている
- ③ ①も②も平中の浮気に起因する出来事だが、②で妻の知恵によって夫の浮気がやむという結末にすることで、結局は元の鞘さやに収まるという夫婦の姿が描かれている
- ④ ①も②も妻には逆らえない気弱な平中ではあるが、②で妻の策略にはまってみつともない姿をさらすことで、単なる色好みではない、滑稽な人物像が描かれている

(iii) 空欄 Z に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 鼻が赤いだけなら帝も参内を許してくれるだろうが、平中のように硯瓶の水で顔を拭って顔を黒くすると参内もできないのでやめてほしい
- ② 硯瓶の水で顔を拭いたので、平中のように顔全体が真っ黒になってしまったが、赤い鼻のままでは見苦しくないからよいだろう
- ③ 赤い色が鼻に付いているだけならまだ我慢できるだろうが、平中のように顔が黒くなると困るので硯瓶の水で顔を拭うのはやめてほしい
- ④ 鼻に赤い色が付いていると恥ずかしくて参内もできないので、平中のように硯瓶の水で顔を拭って誰なのがわからないようにしてほしい

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

sample

2027
共通テスト
直前対策問題集

第5回

国語

200点／90分

第5回

第5問

中国では縁起の良い奇数が並んだ九月九日を「重陽の節句」と言って、菊の花を酒に浮かべて飲み、邪気を払う習慣があった。そこで「十日の菊」と言えば、「時機を逸した用をなさないもの」の例えとして用いられるようになった。次の文章は、唐の鄭谷の【詩】「十日菊」とそれに関連する【資料】Ⅰ、Ⅲである。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 45）

【詩】

十日菊

節（注1）去リ蜂ハ愁フルモてふハ蝶フ不レ知ラ

曉ニ庭マタ還めぐる繞（注2）折セル残ラ枝ニ

自おのづから縁よル今ノ日ノ人ノ心ナルニ別ニ

未ダ必ズシモ秋ニ香ハ一ニシテ夜ハ衰ニ

（『三体詩』による）

【資料】

I 曾^(注3)子固亦云詩^A当^ム使^ム人^ヲ一^ニ覽^ミ語^ヲ尽^ス而^{シテ}意^ヲ有^ラ余^リ乃^チ古^ノ人^ノ用^{フル}

心^ヲ処^ス如^キ詠^ム十^ノ日^ノ菊^ヲ是^ト也^ト

II 山^(注4)谷^ヲ反^ツ以^テ詠^ム十^ノ日^ノ菊^ヲ為^ス病^ニ在^リ氣^(注5)不^レ長^ゼ因^リ言^フ文^章以^テ氣^ヲ為^ス

主^ト西^(注6)漢^ノ文^字所^リ以^テ雄^(注7)深^ニ雅^ニ健^{ナル}者^ハ其^ノ氣^{ズルガ}長^ク故^ト也^ト

III 一^ノ人^ノ之^{ミルヤ}視^ラ菊^ヲ直^ニ繫^カ其^ノ時^ニ焉^ニ耳^ト当^リ其^ノ時^ニ則^チ重^ク之^ト而^{シテ}非^ズ為^ル其^ノ有^ル

所^リ加^フ過^グ其^ノ時^ヲ則^チ否^シ之^ト而^{シテ}非^ズ為^ル其^ノ有^ル所^リ損^ズ也^ト

【資料】 I、IIIは『歴代詩話』による

(注)

- 1 節——重陽の節句。
- 2 折残——折れる。
- 3 曾子固——人名。曾鞏（二〇一九～一〇八三）のこと。
- 4 山谷——人名。黄庭堅（二〇四五～一一〇五）のこと。
- 5 気——個性。
- 6 西漢文字——前漢の文学作品。
- 7 雄深雅健——雄大で意味が深く上品で勢いがある。

Sample

問1 この【詩】の形式と押韻の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 形式は七言律詩であり、「枝」「衰」で押韻している。
- ② 形式は七言律詩であり、「知」「枝」「衰」で押韻している。
- ③ 形式は七言絶句であり、「枝」「衰」で押韻している。
- ④ 形式は七言絶句であり、「知」「枝」「衰」で押韻している。

問2 波線部(ア)「所以」・(イ)「直」のここでの読み方として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 33・34。

(ア) 「所以」
33
 ① いかなる
 ② ゆゑん
 ③ いくばく
 ④ ゆらい

(イ) 「直」
34
 ① よく
 ② みな
 ③ ただ
 ④ また

問3

波線部(1)「反」・(2)「因」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 35 ・ 36。

(1)

35 「反」

- ④ ③ ② ①
 だから 実に 逆に いつも

(2)

36 「因」

- ④ ③ ② ①
 たとえば そのまま そこで しかし

Sample

問4 傍線部A「詩_レ当_レ使_二人一_レ覽、語_レ尽_一而意有_レ余。」の解釈として最も適當なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 詩は、人に一たび読ませると、当然言葉をつくして表しさらに意味に余韻が生じるようにさせるべきである。
- ② 詩は、人に一たび読ませると、今にも言葉が終わっても意味に余情が漂うようになるものである。
- ③ 詩は、人に一たび読ませると、当然言葉が終わっても意味に余韻が生じるようにさせるべきである。
- ④ 詩は、人に一たび読ませるに当たっては、言葉で表すよりも意味に余情が漂うようにさせるべきである。

問5 傍線部B「当_二其時_一則_レ重_レ之。而非_レ為_二其有所_レ加。」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適當なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 当_二其時_一則_レ重_レ之。而非_レ為_二其有所_レ加。
其の時に当たれば則ち之を重んず。而も其の加はる所有るが為に非ず。
- ② 当_二其時_一則_レ重_レ之。而非_レ為_二其有所_レ加。
其の時則ち重きに当たるが之なり。而も其の加はる所有るが為に非ず。
- ③ 当_二其時_一則_レ重_レ之。而非_レ為_二其有所_レ加。
其の時に当たれば則ち之を重んず。而して其の有るが為に加はる所を非とす。
- ④ 当_二其時_一則_レ重_レ之。而非_レ為_二其有所_レ加。
其の時則ち重きに当たるが之なり。而して其の有るが為に加はる所を非とす。

問6 【資料】Ⅰ・Ⅱにおける【詩】の評価についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解

答番号は 39。

- ① 曾鞏は肯定的に評価し、黄庭堅は否定的に評価しているが、「気が長じている」ことを重んじているのは黄庭堅だけである。
- ② 曾鞏は肯定的に評価し、黄庭堅も肯定的に評価しており、「気が長じている」ことを重んじている点も共通している。
- ③ 曾鞏は否定的に評価し、黄庭堅は肯定的に評価しているが、「気が長じている」ことを重んじているのは曾鞏だけである。
- ④ 曾鞏は否定的に評価し、黄庭堅も否定的に評価しており、「気が長じている」ことを重んじている点も共通している。

問7 【詩】の鑑賞として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 40。

- ① 重陽の節句が過ぎてしまっても蜂や蝶はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、香りは決して一夜で衰えたわけではないと嘆いている。
- ② 重陽の節句が過ぎてしまっても蜂はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、香りは必ずしも一夜で衰えたわけではないと嘆いている。
- ③ 重陽の節句が過ぎてしまっても蝶はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、香りは決して一夜で衰えるはずがないと嘆いている。
- ④ 重陽の節句が過ぎてしまっても蝶はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまった菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、香りは必ずしも一夜で衰えたわけではないと嘆いている。

(下書き用紙)

sample

2027
共通テスト
直前対策問題集

第5回

国語

sample

第5回 国語 チェックシート

解答番号	解答欄									配点
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
1	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	2
2	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	2
3	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	2
4	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	2
5	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	2
6	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
7	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6
8	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
9	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
10	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	4
11	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	4
12	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6
13	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6

解答番号	解答欄									配点
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
14	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6
15	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
16	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
17	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6
18	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
19	①	●	③	④	●	⑥	⑦	⑧	⑨	3
20	①	●	③	④	●	⑥	⑦	⑧	⑨	3
21	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	4
22	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	5
23	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	5
24	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	4
25	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	4
26	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	4

(順不同)

解答番号	解答欄									配点
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
27	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6
28	①	②	③	④	●	⑥	⑦	⑧	⑨	6
29	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
30	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
31	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	7
32	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	5
33	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	3
34	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	3
35	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	4
36	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	4
37	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6
38	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6
39	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	6

解答番号	解答欄									配点
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
40	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	8
41	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
42	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
43	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
44	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
45	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
46	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
47	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
48	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
49	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
50	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
51	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
52	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	

第3問 自己採点小計	第3問 (20)					第2問 自己採点小計	第2問 (45)								第1問 自己採点小計	第1問 (45)										問題 番号 (配点)
	問4	問3	問2	問1			問7	問6	問5	問4	問3	問2	問1	問6 (ii) (i)		問5	問4	問3	問2	問1 (オ) (エ) (ウ) (イ) (ア)						
	23	22	21	20	19		18	17	16	15	14	13	12	11		10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	④	①	②	⑤	②		④	①	③	④	②	①	④	③		①	④	①	③	③	②	④	②	④	②	
5	5	4	3	3	7	6	7	7	6	6	6	4	4	7	7	6	7	2	2	2	2	2				

【解答・採点基準】
(90分 200点満点)

第5問 自己採点小計	第5問 (45)								第4問 自己採点小計	第4問 (45)										問題 番号 (配点)
	問7	問6	問5	問4	問3 (2) (1)	問2 (イ) (ア)	問1	問4 (iii) (ii) (i)		問3	問2	問1 (ウ) (イ) (ア)								
	40	39	38	37	36	35	34	33		32	31	30	29	28	27	26	25	24		
	④	①	①	③	②	②	③	②		④	④	③	①	⑤	④	③	①	②		
8	6	6	6	4	4	3	3	5	7	7	7	6	6	4	4	4				

※の正解は、順序を問わない。

第1問 現代文（論理的文章）

【出典】

伊豫谷登士翁「移動経験の創りだす場——東京島とトウキョウ島から『移民研究』を読み解く」の一節。本文は、伊豫谷登士翁・平田由美・編『帰郷』の物語／「移動」の語り——戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』（二〇一四年刊 平凡社）に収録されている。

伊豫谷登士翁（いよたに・としお）は、一九四七年生まれの社会学者。一橋大学名誉教授。主な著書に、『グローバリゼーションと移民』『グローバリゼーションとは何か——液化化する世界を読み解く』などがある。

【本文の要旨】

I 序論——移動について研究することの重要性（①）

現代は「グローバリゼーションの時代」であり、ここでは「国境を越える人の移動」についての「研究」が「重要な関心事」となっている。そうした研究は、社会科学に新たな可能性をもたらすものである。

II 近代社会における移動と、それについての従来の研究（②～⑦）

「近代」という時代は、世界が「国家」という単位によって作られていた時代であった。「近代国家」とは、「地理的に画された境界」、つまり国境線によって区切られた国家であり、そのなかには「ナショナルな政治、経済、社会、文化といった装置」が設けられている（②）。

そこでの国境線は、もちろん政治権力によって人為的に引かれるものだ。領土をめぐる争いなどのたびに、国境線は、「人びとの意思とは関係なく」引き直されてきたのである（③）。

そうした「近代」という時代においても、もちろん「境界内」での移動Ⅱ人が一つの国家のなかで移動することと、「境界外」への移動Ⅱ人が別の国へと移動することがあった。そしてこの両者は、意味の異なるものと見なされるようになっていったのである（④）。

まずは「境界内」の移動だが、これは「伝統的農村社会から近代都市への移動」に代表されるものである。たとえば農村において実家の仕事を継ぐ必要のない者が、都会に出て工場で働く。これは、近代化や都市化の過程で必然的に生

じた「境界内」での移動なのである（④）。

これに対して「境界外」への移動は、近代国家によって「非日常的なもの」と見なされてきた。こうした移動には、「国家によって社会的な矛盾のはけ口として（人が）組織的に送り出され」る場合や、「労働力不足に対応して（人を）組織的に導入」する場合などがある（⑤）。たとえば日本において、労働力不足を解消するために他のアジアの国から労働者を迎え入れるといったことがそれであろう。

こうした「国境を越える移動」は、近代国家という「ナショナルな装置」を維持するのに不可欠なことであることが多い。たとえば日本の場合も、経済を維持し発展させるために外国人労働者を迎え入れていることは、いうまでもないだろう。にもかかわらず、そうした「境界外」への移動は、「国家にとっては、あくまでも一時的で、例外的な出来事とみなされてきた」（⑤）。それはなぜだろうか。

それは、近代国家が「地理的に画された境界」の内部に形成されているものであり（②）、その境界内に「国民」を「囲い込」むことで成立しているものだからである（⑥）。つまり近代国家は、できることならば国民を他国に流出させることも、他の国民を自国に迎え入れることもなく、自分の国だけですべてを完結させたいのである。しかし、そんなことをしているのは経済的に行き詰まってしまうので、しかたなく移民を受け入れるといったことをする。やや極端な言い方をすれば、国境を越える移動とは、近代国家にとっては必要悪のようなものなのだ。だからこそ、これまで近代国家は、政策によって「国境を越える移動」を「大きく規定」してきたのである（⑦）。

そして「移動」についての「研究」も、これまでは、こうした近代国家のあり方に合わせるようなかたちで行われてきたのである。たとえば従来の「移民研究」は、「境界」によって区切られた近代国家というものの存在を前提にして「体系化」され「制度化」されてきた。「近代における知の枠組み」に即したかたちで行われてきた（④）。しかし、そうした知の枠組みにもとづいて作られてきた「社会科学」は、いま「閉塞状況」を迎えているのである（①）。

III 移動が容易になり、その形態も多様になった現代（⑧～⑩）

近年では、「輸送通信技術の発達」によって、人の移動は、かつてとは比べ

ものにならないほど容易にできるようになり、ごく当たり前のものとなった。しかもその形態は、きわめて多様化している(8・9)。このような時代だからこそ、「移動とはなんであるのか」ということを、あらためて考察してみる必要があるのだ(10)。

IV 移動についての従来の研究と、望ましい研究(11)~(14)

かつて国境を越えて移動する人間は「移民」と呼ばれたが、その移民についての「研究」は、移民の「受け入れ社会の必要から始まった」(11)。移民を受け入れる国家のほうには、「うちの国にやって来る移民はこういった人たちであってほしい」といった手前勝手な願望がある。そして、移民を送り出す国は弱い立場にあり、移民を受け入れる国は強い立場にあるといった「非対称」的な力関係がある(12)。そのため従来の「移民研究」も、移民の側からではなく、それを受け入れる側の立場から、受け入れる側の都合のいいように行われてきた。その意味で、従来の「移民研究」は「作為」的なものだったのだ。

しかしグローバル化の時代である現代では、人の移動はごく当たり前のこととなり、誰もが「移民」となりうる可能性をもっている。しかも世界のなかで、豊かな地域と貧しい地域との区別もきわめて曖昧なものになってきている(13)。

そうしたことの背景には、「国民国家を創りあげてきた装置が揺らいできている」という現状がある。だから人の移動について研究することは、グローバル化した現代という時代について考察するうえで、大きな手がかりになるのである(14)。

【読解のポイント】

本文全体を通じて筆者は、人の「移動」について、従来のように「国民国家」というものを基準にして考えてはいけないということを主張している。こうした筆者の考え方は、次のようにまとめることができる。

〈X 従来のあり方〉

・境界線によって画された「国民国家」という単位によって、世界が形成されていた。

←

・国境を越えて移動する者は「移民」と見なされ、それは国家にとつてあくまで一時的、例外的な存在とされた。

←

・移民についての研究も、それを受け入れる国家の側の立場に合わせて、作為的なかたちで行われてきた。

〈Y 筆者の考え方〉

⇔

・現代はグローバル化の時代であり、国民国家という制度そのものが揺らぎはじめている。

←

・国境を越えた人の移動がごく日常的なものとなり、その形態も多様化している。

←

・移動についての研究は、重大な関心事となる。

注意してほしいのは、本文では、たとえば「一九〇〇年代まではXというあり方が一般的だったが、それ以降はYの時代になった」というような説明はなされていないということである。XとYとの違いは、時代の違いというよりも、見方・捉え方の違いなのだ。Xにあるような考え方は、現代でもごく一般的なものとして社会のなかに定着している。しかし、グローバル化の時代である現代において、世界のあり方を説明するには、Xのような従来の見方にとらわれてはならない。こうしたことを筆者は主張しているのである。

【設問解説】

問1 漢字問題

(ア) 「試金石」は、「価値を判定する材料となる物事」のことをたとえていう言葉で、たとえば「この新事業は会社の未来を占う試金石となるだろう」といった使い方をする。①「列席」、②「岩石」、③「重責」(＝重い責任)、

④「戸籍」。

(イ)「貨幣」。①「開花」、②「課税」(＝税金を課すこと)、③「看過」(＝見過ごすこと)、④「百貨店」。

(ウ)「雇用」は(人を雇うこと)。①「復古」(＝古い昔に戻る)、②「解雇」(＝雇っていた人をくびにすること)、③「連呼」、④「故人」(＝亡くなった人)。

(エ)「途上」。①「徒党」、②「吐露」(＝心中の思いを隠さず述べる)、③「企画」(＝くわだて、意図)、④「途絶」(＝とだえること)。

(オ)「根幹」は、(物事の根本の重要な部分)という意味。①「静観」(＝冷静に見守ること)、②「幹線」、③「間隙」(＝すきま)、④「雑感」(＝種々雑多な感想)。

問2 傍線部に続く部分の内容について答える問題

傍線部に述べられているのは、「国境を越えた移動をする人びとは、国内で移動をするときとは異なる思いを抱く」ということ。したがってここでは、各選択肢の形式を見てもわかるとおり、「国内の移動」と「国境を越える移動」との相違点を答えればよいということになる。

そこで、まず「国内の移動」について述べられている部分をチェックしてみる。すると、④の第2文で、「国内の移動」とは「都市化」にともなう「近代」的なものと述べられているのがわかる。ここ以外で「国内の移動」について直接的に述べられている箇所はないのだが、⑤の冒頭には、「越境(＝国境外への移動)」は「非日常」的なものとして扱われてきたと述べられている。これを裏返せば、「国内の移動」とは「近代」においては日常的なものとして行われてきたということができる。

次に「国境を越える移動」について確認してみると、まず⑤の冒頭で、国境を越えて移動する人びとは「近代国家」によって「非日常」的なものとして扱われてきたと述べられている。しかも④の第2文によれば、「境界を越える人の移動」は「国家の直接的な介入」を受ける。しかもそうした「介入」は、⑥冒頭の一文にあるとおり、「国家が、主権行為として、越境する人びとを管理」するというかたちで行われてきたのである。

こうした「介入」が、越境する人びとに「国内の移動とは異なる思い」を

抱かせるのは当然であろう。以上のように考えれば、正解は④だとわかる。他の選択肢については以下のとおりである。

①「国内の移動は、伝統社会のなかでごく自然なものとして行われてきた」が誤り。傍線部は「国境」の成立した近代社会についての問題であり、「伝統社会」のことは関係がない。また⑤の第2文に「ときとして」とあり、国境を越える移動がつねに「人々の意思に反する」ものだったといえない。

②「国内の移動は、社会的な理由ではなく」が間違い。「伝統的農村社会から近代都市への移動」といった国内における移動は、「都市化」という社会的現象のなかで生じたものである(④)。

④「国境を越える移動」について「例外的な出来事としてさえ認められず」とされている点が間違い。ここでは、国境を越える移動がすべて認められていなかったということになってしまう。実際には、「一時的で、例外的な出来事」として認められていたのである(⑤)。

問3 傍線部の内容について答える問題

傍線部で述べられていることについては、⑧、⑩で述べられている。この部分の内容と照応させながら、傍線部そのものがどういふことを言っているのかを確認していこう。

まずは傍線部前半の「輸送通信手段の発達」だが、「輸送」手段の発達については、⑧の前半で、それが「大洋を渡る移動を容易にした」と述べられており、⑨の前半でもやはり、「大洋を越えた地球の裏側への移動も、今日ではきわめて容易になった」と述べられている。また「通信」手段の発達については、⑨の後半で、インターネットなどの普及により、「経済活動に不可欠な情報」だけでなく「個人的な日常生活情報」までもが「リアルタイムで容易に入手可能」になったと述べられている。

では、そうした「輸送通信手段の発達」によって、どのようなことがもたらされたのか。これについてはいろいろなことが書かれているが、端的に言えば、⑧の後半で具体的に述べられているように移動の形態が多様化し、さらに⑨の末尾で述べられているように、「場という感覚」が失われ、「移動という感覚そのものが変容してきている」ということであろう。

以上の内容に最も即している③が正解。他の選択肢については以下のとおりである。

- ① 「かつては学問や研究の対象となっていなかった移動」が誤り。⑪・⑫にあるとおり、以前から人の移動に関する「研究」は、「作為性」のあるものではあったにせよ、存在していたのである。
- ② 「個々人が移動による恩恵を受けにくくなるという現象が生じている」が、本文に述べられていない内容。また、⑧後半に具体的に述べられていることなどは、「移動による恩恵」と考えることができる。
- ④ インターネットなどの通信手段が「移動した人々に不安をもたらしている」という趣旨の選択肢だが、そうしたことは本文に書かれていない。むしろ⑨の後半などを読むと、インターネットなどによって移動した人びとが「情報」を得られるようになったことは、そうした人びとの不安を解消する方向に働くのだろうと推測できる。

問4 「国民国家」について答える問題

傍線部は本文の最終段落にあるのだが、この「国民国家」について、それがどういふものが直接的に説明されているのは、おもに②⑦である。そこで、各選択肢をこの部分の内容と照合し、消去法で答えを決めていくことにしよう。

- ① まず選択肢前半の内容は、⑤の第2文の内容と合致している。近代国家は、ときとして人の移動を「組織的」に行っていたのだが、それは「社会的矛盾」や「労働力不足」を何とかしようとするためだったのである。次に選択肢後半だが、「閉じられた空間としての国家を創りあげるために、国境を設定して」というのは、②の前半や⑥の冒頭の内容などと一致している。そして「国民の移動を管理しようとした」というのも、やはり⑥の冒頭の一文などに合致している。以上のことからわかるとおり、この①が正解である。

② 「産業資本の生産労働に従事する者の移動だけを認め」というのが間違い。たしかに「伝統的農村社会から近代都市への移動」(④)や「労働力不足に対応して」の外国人労働者の移入(⑤)などは「産業資本の生産労働に従事する者の移動」に該当すると考えられるが、「社会的な矛盾の

はけ口として(人が)組織的に送り出される(⑤)といったことは、「産業資本の生産労働に従事する者の移動」に該当するかどうかわからないのである。

- ③ 「戦争や災害といった国家関係の展開や、諸国家による政策の歴史的な変動の影響を最小限にとどめ」ようにしたのは移動が制限されてきた理由だが(⑦)、この選択肢では、それが「国境を設定した」理由になっている。また、「土地の空間的な特徴を生かして確固とした国境を設定した」というのも、本文に述べられていない内容である。

④ 選択肢前半の内容がまず誤り。たしかに近代の国民国家では「伝統的農村社会から近代都市への移動」が行われていたが(④)、それは「都市化」にともなう経済活動の一環であった。したがって、そうした移動は国民国家に「揺らぎ」をもたらすものというよりも、むしろ国民国家を経済的に発展させるためのものだったと考えるべきだろう。しかも、選択肢前半の「農村から都市への移動」というのは、国内の移動であり、それと「越境的な(＝国外への)移動」との間に因果関係があるかのように書かれている点も間違いである。

問5 本文の主題について答える問題

【読解のポイント】でも確認したとおり、筆者は本文全体を通して、「人の移動について従来のような「研究」は望ましくない」といったことを主張している。こうした筆者の主張を、あらためてまとめてみよう。

まず筆者は②で、近代においては、境界線によって画された「国民国家」という単位によって世界が成立しているという考え方が一般的だったと指摘する。そうした時代には、人の移動についての研究は「移民研究や国際労働力移動研究あるいは難民研究」などと呼ばれており(⑨)、ここでは、人の移動とは、「国家にとって、あくまでも一時的で、例外的な出来事」だとされていた(⑤)。それは、そうした研究が、それを受け入れる国家の側の立場に合わせて、作為的なかたちで行われてきたからである(⑪・⑫)。

これに対して筆者は、グローバル化の時代である現代では、国境を越えた人の移動もごく当たり前のことになっており、その形態も多様化しているということを描する(⑧⑩)。そしていま、そうした人の移動に

ついで研究することは、「これまで自明とされてきた国民国家の揺らぎを解き明かす」という意味をもち、「閉塞状況にある社会科学の諸分野」が「新しい枠組み」を考えていくことにもつながっていくはずだと、主張しているのである(Ⅰ)。

以上の内容に最も即している④が正解。他の選択肢については以下のとおりである。

① かつての移民研究を「移民を送り出す側の要請によって始まった」ものだとしている点が間違い。Ⅲの末尾に、移民研究は「受入れ社会の必要から始まった」と明記されている。

② かつての移動についての研究を「国民国家の内部での移動に関するものに限定されて」いたとしている点が間違い。④の後半やⅠ・Ⅱにあるとおり、国境を越える移動についての研究は、以前から「移民」の研究というかたちでなされていたのである。

③ 「移動の規模の大きさに着目すること」こそが「最も重要」だという趣旨が、Ⅲ前半の内容に反している。「人の移動への関心は規模のみにあるのではない」のである。

問6 本文の表現や、構成・展開について答える問題

(i) 「**適当でないもの**」を選ぶという指示をしっかりと確認したうえで、各選択肢の内容を本文と丁寧に照合していこう。

① これは明らかに「過去の問題にはあえて言及せず」がおかしい。「**読解のポイント**」などでも確認したとおり、むしろ筆者は、過去における移民研究のあり方がいかに偏ったものだったかということを描き出している。したがって、この①が「**適当でないもの**」である。

② 「自明とされてきた」というのは(当然のものと思われる)といった意味。したがってこの表現は、「暗黙のうちに」とほぼ同じ意味を表している。そして筆者は、これらの表現を通して、かつては移民について考えるとき、国家を前提にするという暗黙の了解のようなものがあったということを主張していると考えられる。したがって、「こうした表現にも筆者の問題意識が表れている」というのも、正しい説明である。

③ 「形成」というのはまさに「人為的に作られ」たという意味であろう。そして実際に、③の第2文・第3文にも、国境線とは国家によって引かれたものだという趣旨のことが述べられている。したがって、この③も正しい説明である。

④ Ⅱにあるとおり、この「共生」という言葉は、「受入れ側」という特定の立場から「唱えられた」ものである。そして、特定の立場から声高に唱えられるような言葉のことは、一般に「スローガン」と呼ばれる。したがって、この④も正しい内容を述べたものである。

(ii) これも「**適当でないもの**」を選ぶという指示を見逃さないようにしたい。

① ⅧやⅩでは、現代におけるさまざまな「移動」がどのようなかたちで行われているかということが、具体的に述べられている。したがって、これは「多様化してきた移動の諸形態」について「具体的に紹介」したものだといえることができ、この①は正しい説明だといえる。

② **【本文の要旨】**でも確認したとおり、Ⅱ～Ⅶでは主に、「国民国家」を単位にした「近代」世界の成立と、そこでの「移動」やその研究のあり方といったことが説明されていた。これに対してⅧ以降では、それとは異なるところのある(現代Ⅱグローバルゼーションの時代)についての説明がされている。したがって、この②も正しい内容である。

③ 「世界がふたたびグローバル化以前の状況に戻ろうとする傾向を見せている」というようなことは、本文のどこにも述べられていない。したがって、この③が「**適当でないもの**」である。

④ ⅠとⅣには、ともにこれからの移動についての研究がもつ可能性といったことが述べられており、二つの段落は内容的に対応しているといえる。しかも**【読解のポイント】**でも確認したとおり、そこに述べられていることは本文の主題ともいえるものである。したがって、この④も正しい内容である。

第2問 現代文 (文学的文章)

【出典】

織田作之助「秋深き」の一節。初出は「大阪文学」昭和十七年一月号。本文は、織田作之助『世相・競馬』(講談社文芸文庫 二〇〇四年)に拠り、出題の都合で途中一部を省略している。

織田作之助(おだ・さくのすけ)は、一九一三年(大正二年)生まれの小説家で、「オダサク」の愛称で知られる。文学史上では、太宰治や坂口安吾らとともに、無頼派または新戯作派の一人として数えられるが、大部分の作品は自身の生地である大阪を舞台としており、登場人物のほとんどもそこで暮らす庶民である。代表作に「夫婦善哉」など。一九四七年(昭和二十二年)、結核によって他界した。

【本文の要旨】

リード文(前書き)にあるとおり、この小説は一九四二年(昭和十七年)に発表されたものである。語り手の「私」は「肺を病んで」いたとあるが、これは肺結核に罹っていたということである。当時、結核は不治の病とされており、罹患した場合は、空気のよい土地などで療養し、病気の進行を遅らせるくらいしか手立てがなかった。「私」はそうした理由で温泉宿に逗留しているが、そこで隣室に泊まっていた夫婦と知り合いになる。

① 朝の散歩での「女」との会話(1〜67行目)

ある朝、散歩していた「私」は、不意に隣室の「女」から呼びとめられ、「御一緒に歩けません?」と言われた。「私」は「迷惑に思った」が、断ることもできず、「女」と並んで歩きたず。すると「女」は「私」に、自分の夫のことをどう思うかと訊ねてきた(1〜7行目)。

「答えようもなかった」し「答えたくもなかった」「私」は、「露骨にいやな顔をしてみせた」。すると「女」は、「貴方(Ⅱ関西弁で「おたくさま」といった意味)のような鋭い方は、あの人の欠点くらいすぐ見抜ける筈でっけど……」と言い、自分の夫の欠点をあげつらう。「女」は、自分の夫は「教養」も「知性」もなく、そのことは夫の筆蹟をみればわかるのだと言った(8〜16行目)。

その話を聞いているうちに、「私」は腹が立ってきて、「筆蹟くらいで、人間の値打ちがわかってたまるものか」と感じ、「女」に向かって「奥さんは字がお上手なんですね」と皮肉を言ってみた。しかし「女」は「顔色も声の調子も変え」ずに、「貴方なんか、きつとお習字上手やと思いますわ。お上手なんでしょう?」と話しかけてくる。さらに「女」は「一方的に話を続け、自分はお習字だけでなくお花も好きなのだと言う。そして、自分は「あんな教養のない人と一緒になつた」「不幸な女」なのだから「お習字やお花をして、慰める」しかないのだが、夫にはお習字やお花の趣味がないから不満なのだ、愚痴めいた話をするのだった(17〜28行目)。

さらに「女」の話は続き、今度は「貴方キネマスター(Ⅱ映画スター)で誰がお好きですか?」と尋ねてきた。「私」が黙っていると「女」は、映画スターの好みについても自分と夫ではまったく意見が合わないのだといったことを一方的に喋り続ける。そして再び自分の夫について、「下品な女優」のことを好むような「教養のない人」だと、悪ぐちを言った。「私」は「女」の口にする「教養」という言葉に「辟易(Ⅱうんざり)」してしまった(28〜41行目)。

「女」の話は終わることがなく、またしても自分のことを「不幸な女」だと言う。しかし「私」には、「むしろ女があわれに思えた」。しかも「女」は、自分は今度まで何度も「夫との仲を」解消しようと思ったのだと言い、夫の気になるところをあげつらっていく。いわく、自分が別れ話を持ち出すと、夫は「すぐ泣きだして」しまい、自分の「機嫌」をとろうとする。しかし「あんまり機嫌とられると、いや」であり、気持ちがわるくてかなわない。しかも夫は、「えげつない」ほどの「焼餅やき」だ……(42〜52行目)。

話を聞いていた「私」は、「こんな夫婦の子供はどんな風に育てられているのだらう」と思い、「お子さんおありなんでしょう?」と尋ねてみた。すると「女」は、自分たちには子供はいないと答え、いま夫とともにこの場所に来ているのは、「この温泉にはいると、子供が出来る」と聞いたからなのだと言った。言われた「私」は「あつ」と思う。子供がほしくてこの温泉に来ているのだとしたら、夫との仲を「解消」したいと言っていた「女」の言葉は嘘だったということになる。そう考えて「私」は、「なにか莫迦にされているような」気分になってしまったのである(53〜58行目)。

そうこうしているうちに、隣室の「男」がやって来て、「私」たちのことを見つけた。「男」にしてみれば、自分の妻が自分以外の男性と歩いているところを目撃したということであり、「女」にしてみれば、そうした場面を自分の夫に見られてしまったというわけである。「男」は「いきなりくると身をひるがえして、逃げるように立ち去り」、「女」は「狼狽をかくそうとするさま」を見せたが、やがて「女」は「私」に、とにかく夫は嫉妬深い男であり（古くは嫉妬のことを「愠気」とも呼んでいた）、いつもこんなふうに分を「尾行している」のだ、と言うのだった（59～67行目）。

② 湯殿での「男」との会話（68～92行目）

「私」が「女」より一足先に宿に帰って湯殿へ行くと、そこにはすでに隣室の「男」がいた。「ひよっとしたら、ここへ来やはやる思てました」と言うところを見ると、「男」は「私」のことを待ち伏せていたようだ（68～72行目）。

湯槽のなかで「私」は、いきなり「男」に腕を掴まれ、「彼女はなんぞ僕の悪ぐち言うてましたやろ？」と詰問される。「私」が「いや、べつに……」とはぐらかしたような返事をする、「男」は、妻はあなたに自分のことを何か言っただからそのことを隠さず言ってくれ、と「ねちねちとからんで来た」。それでも「私」が黙っていると、「男」は、あなたは黙っているが自分の悪口を妻から聴いているはずだと決めつけてきた。さらに「男」は「私」に、妻の言葉を信用してはいけない、自分は「不幸な女」だと言って人の同情をひこうとするのは彼女の手口なのだと言ってきた（73～85行目）。

「男」はさらに話を続け、妻は自分のことを焼餅やきだとも言っていたのだろうが、彼女の方がもっと焼餅やきなのだと主張する。そして「ほんまにあんな女子にかかったら、一生の損でっせ。そない思いはれしまへんか」と「私」に同意を求めたのだった。そんなふうに喋り続けていた「男」だったが、妻が湯殿にやって来ると、おとなしくなってしまう（86～92行目）。

③ その晩の宿での「女」との会話（93～127行目）

部屋に戻った「私」は、夫婦のことを考えた。彼らは互いに相手の悪ぐちを言い合っているが、実際には子供がほしくてこの温泉宿に来ているのだ。そう

考えて「私」は、「案外あの夫婦者はお互い熱心に愛し合っているのではないか」と思うのだった。やがて隣室から襖越しに、夫婦の口論する様子が聞こえてきた。「私」と「女」が並んで散歩していたことが問題にされているらしい。「そんなことで夫婦喧嘩されるのは、随分迷惑な話だ」と、「私」は「うんざり」してしまった（93～96行目）。

夕食後、「私」が安静をとっていると、不意に襖がひらき、隣室の「女」がはいって来て（ちなみにこの時代の旅館は、鍵のかかる個室ではなく、部屋と部屋とが襖だけで隔てられているのが一般的であった）、「私」の前に坐った。どうやら、夫がひとり出掛けて行ったので、その隙に「私」のところへ話をしに来たらしい。「私」は「そんなことをされては困ると思った」。今朝は「女」の誘いを断れず彼女と一緒に散歩をしてしまったが、それを目撃されたことが原因で夫婦喧嘩が生じたのであり、似たようなことがまた生じてしまったら、「私」にとっては迷惑なのである。だから「私はむつかしい顔をした」のだが、「女」はそんなことにかまわず、「あの男にはほんまに困ってしまいました」と、またしても一方的に話を始める（97～112行目）。

「女」は、自分の夫は「誰にでも私の悪ぐちを言うてまわる」ような「肚の黒い男」だから、「あんな男の言うこと信用せんと言って下さい」と言う。それを聞いた「私」は「誰のいうことも僕は信用しません」と答えたが、それは、「女」の言うことも男の言うことも、てんで身を入れてきかない覚悟をきめていた」からである（113～117行目）。

そうした「私」の言葉を「女」がどこまで理解したかはわからなかったが、彼女はさらに、自分の夫のことを「下劣な人」だと言う。それを聞いた「私」が「そんな下劣な人ですかね。よい人のようじゃありませんか」と「その気もなく」答えると、「女」は突然、眼に「涙をため」て、あなたは何もわかっていない、私は本当に不幸な女なのだ、と訴える。「私」がどう答えていいかわからず黙っていると、「女」は「ほんとうに泣き出して」しまい、「私」は困惑してしまった（118～127行目）。

④ 夫婦を見送る「私」（128～144行目）

翌朝、夫婦が温泉を発つというので、「私」は駅まで見送りに行った。「男」は客引きから、何日かこの温泉に滞在したのだから、子供に恵まれるでしょう

という意味のことを言われていた(128～132行目)。

「男」は大声で妻のことをよび、もうすぐ汽車が来るから「私」に挨拶をしろと促す。すると「女」は「長ったらしい挨拶をし、次に「男」の方も、同じように「糞(くそ)丁寧な挨拶」をした。それを見ていた「私」は、「なにか夫婦の営みの根強さというもの」を感じる。そして夫婦の乗った汽車が動きだすと、「男」は「莫迦(ばか)莫迦(ばか)しいほど」の大声で何かを言う。「女」の方も、女優が演技をしているかのようなわざとらしい恰好で「ハンカチを振った」。それを見た「私」は、二人は「似合いの夫婦」だと感じるのである(132～144行目)。

【読解のポイント】

○ 小説の「視点」を意識しよう

小説を用いた問題では、その小説がどういう視点から描かれているかということがしばしば問われる。そして今回の文章の場合、一貫して語り手の「私」の視点から小説世界が描かれている。つまり、「女」や「男」の内面がそれぞれの立場から描かれているわけではなく、「私」の目に映った「女」と「男」のありようが描かれているのである。

そして小説では、「女」と「男」の振る舞いを見て「私」がどう感じたか、どんな思いを抱くことになったかということが、精緻に描かれている。いかなれば、「女」と「男」に対する「私」の反応を描くことを通して、「女」と「男」の人物像が浮かびあがってくるという仕組みになっており、さらにそうした「私」の反応を描くことを通して、「私」の人物像も示唆されるという仕掛けなのだ。こうした小説世界の描かれ方を意識しながら、本文の読解を楽しんでみよう。

【設問解説】

問1 傍線部とそこに至る部分からうかがえる「私」のありようを答える問題

散歩をしていた「私」が隣室の「女」と出会い、二人で会話をしている場面だが、一読してわかるように、ここでの「私」は終始「女」に対して不快感を覚えている。そして「女」の方はといえば、自分の夫は「教養」がなく、字を書かせても情けなく、お花やお習字の趣味もないといった話をす

る。つまり「女」は一貫して、夫の教養のなさや趣味の悪さを非難するようなことを言っているのである(7～28行目)。

また「女」は、「私」に対し、「貴方(あなた)のような鋭い方は……」(12行目)と言ったり、「貴方なんか、きつとお習字上手やと思いますわ」(22行目)と言ったりしている。「女」は夫と「私」とを比べ、「私」のことを褒めているのである(もちろん、それがどこまで本音なのかはわからない)。

そんな「女」は「私」に対し、あなたは映画スターでは誰が好きかと尋ね、自分の夫は「高瀬」という俳優が好きなのだという。右にあげたことを踏まえれば、ここでの「女」は、自分の夫は趣味が悪いから「高瀬」を好きだと言うが、貴方は趣味がいいからそんなことはありませんよね、という意味のことを言っているのだろうと推測できる。しかし「私」は、「女」の意動を不快に感じていたため、「自分も高瀬が好きなのだ」と「つい」答えてしまったのである。

この「私」の答えが、「女」の嫌がるようなことを「つい」言ったものだということは明白であろう。「私」は「女」に「皮肉」(20行目)を言っており、貴方は字が上手なんでしょうと問われると、「下品な字しか書けません」と答えている(24行目)。これらはどれも、「女」の言葉に対する嫌味のようなものであり、傍線部の言葉も同様のものだといえるだろう。傍線部直前に「高瀬とは高瀬(たかのせ)なにがしか」とあることからわかるように、「私」は「高瀬」がどういう人物か知らない。しかし、「高瀬」が好きだと言えば「女」は嫌がるだろうと感じた「私」は、いわば売り言葉に買い言葉といった調子で、傍線部のようなことを「つい」言ってしまったのである。

以上の内容に最も即している④が正解。「私」は本来ならば気分よく散歩していたはずなのだから、「女」の言葉が「こちらの気分を逆撫(さかぬ)でする」もののように感じられていることは明らかだ。しかも「女」はこちらが「皮肉」を言っても意に介さないかのように話しかけてくるのだから(20行目)、彼女が「次から次へと話してくる」というのも間違いない。そして、そんな「女」に「気障(きさむ)りなもの(＝気に障るような不快感)」を覚えた「私」は、彼女の嫌がりそうなことを「つい」口にしてしまったのである。

他の選択肢については以下のとおり。

① やや紛らわしい選択肢だが、傍線部が好きなの映画スターについて問われ

たことへの答えであるにもかかわらず、「お習字やお花」の話題に終始しており、その意味で設問にきちんと対応しているとは言いがたい。それだけならまだしも、「あえて、自分は品のないものが好きなふりをする」は間違いである。ここでは、品のないものが好きだということを意図的に演じたという意味になってしまい、「つい言った」という傍線部の表現にそぐわない説明になってしまう。

② 「高瀬」という俳優が好きだと答えることが「知性のないふりをする」ことになるのかどうか、本文から確定できない。しかも「女」に反省を促そうとしている」も、それが正しいといえる根拠を本文中に見出すことができない。

③ 「どうにかして彼女の反応を変えてみたい」が、本文から読み取れない内容。また、「好きな俳優は高瀬です」という返答が「より直截な私たち」での「嫌味」だとはいえない。この返答は「嫌味」ではあるかもしれないが、どちらかといえば遠回しな言い方であろう。

問2 「女」の言葉を「男」と「私」がどう受けとめているか、答える問題

「女」は幾度も自分のことを「不幸な女」だと言っているが、そうした彼女の言葉を、「男（＝「女」の夫）」と「私」が、それぞれどう受けとめているかを読み取る。

まず「男」の受けとめ方だが、これについては82～84行目にはつきりと書かれている。「男」によれば、自分が「不幸な女子」だと「ひとに言いふらす」のは妻の「癖」であり、「手（＝手口、やりくち、手段）」であって、そんなふうに行くことによって妻は、うまい具合に「相手の同情」をひこうとしているのだという。つまり「男」は、妻が自分を「不幸な女」だと言うのは、他人の同情をひくための手口であると受けとめているのである。

次に「私」の受けとめ方だが、これについては、波線部⑥～⑩についてそれぞれ確認してみよう。

まずは波線部⑥だが、ここでは波線部の直後で「女」が、「ところで、話ちがいますけど、貴方キネマスターで誰がお好きですか？」と話題を変えてきている。そのため「私」は、「ほんまに不幸な女でしょう？」という「女」の言葉に対して、何も答えていない。したがって⑥については、設問を解く

際にとくに配慮する必要はないということがわかる。

次に波線部⑦だが、ここで「私」は、「女」のことを「あわれに」感じている（44行目）。しかし、だからといって「私」が「女」に同情しているなどと早合点してはいけない。その直後に「かりに女が不幸だとしても……」とあるのに注意しよう。つまり「私」は、自分は不幸だと言っている「女」の言葉を、基本的に信じてはいないのである。

そして波線部⑧だが、ここで「ほんまに私は不幸な女ですわ」という言葉を聞いた「私」は、「答えようもなく」「黙って」いる（52行目）。「私」は、「女」の言葉に積極的に答えようなどとは考えてはいないのである。

また、さらに決定的な記述がある。それは57行目の「全く、私は女の言うことも男の言うことも、てんで身を入れてきかない覚悟をきめていた」という一文である。以上のことから、「私」は、自分で自分のことを不幸だと知っている「女」の言葉を、真剣に聞こうとはしていないのだということがわかる。

以上の内容に最も即した説明になっている⑨が正解。「手練手管」とは、「人をあやつる手段・技巧」といった意味であり、「男」の言葉で言えば、「相手の同情」をひくための「彼女の手」（83行目）のことである。

他の選択肢については以下のとおり。

② 「男」が「女」の言葉を「一時的な不満の表れ」としか見ていないかどうか、本文から確定できない。また、「私」が「女」の言葉を「女」の本心の表れ」だと受けとめているというのも誤り。前述したとおり、44行目の「かりに女が不幸だとしても」という表現から考えると、「私」は「女」の言葉をさほど信じていないということがわかる。

③ 選択肢後半は44～45行目の内容に即しているともいえるが、前半の内容が間違っている。「男」は、妻が「自分は不幸な女だ」と言うのは相手の同情をひくための手だと考えており（82～84行目）、自分は妻からいつも無茶なことを言われている（86～89行目）などと言っている。このように言う「男」が、妻が「不幸だ」と言う原因が自分にあると思っただけでは考えられない。

④ 選択肢前半は82～84行目の内容に即しているが、後半が間違い。「私」が「女」の優しさやけなげさを感じているという言葉を根拠づけるよ

うな記述は、本文中にない。

問3 傍線部における「男」のありようについて答える問題

傍線部の「ねちねち」は「粘りつくようにしつこいさま」を表す擬態語であり、「から(む)」は「まとわりつく、つきまとう」といった意味をもつ言葉である。したがって、傍線部は「男」がしつこくつきまとうてきた」と言い換えることができる。

では、「男」は「私」につきまとうて何を言っているのか。傍線部前後から明らかのように、「男」は、妻が自分について何か言っていたのなら、そのことを隠さずに言っしてほしいと、「私」に懇願しているのである。そして、そんなふうには懇願するのは、「男」が、妻が自分の悪ぐちを言っているのではないかという疑いを抱いているからである。

以上の内容を過不足なく説明している②が正解。「疑心暗鬼」とは「疑心暗鬼を生ず」という言葉の略で、「何かを疑う心が起こると、暗闇にあるなんでもないものが鬼の形に見えるように、いろいろなことが恐ろしく疑わしいもの感じられてくる」といった意味である。

他の選択肢については以下のとおり。

① 「私」がいくら真摯に答えても「男」が明らかな誤り。「男」にあれこれと問われても、「私」は「いや、べつに……」としか答えていない(76行目)。

③ 「男」が「私」の「嘘を見抜いて非難してきた」とあるが、これは傍線部の「ねちねちとからんで来た」という表現に対応していない。しかも、「男」は「私」に質問し懇願しているだけであって、「非難」しているわけでもない。

④ 「私」も妻と一緒に「自分に対する悪ぐちを言っているのではないか」としている点が間違い。「男」が疑っているのは、妻による自分への悪ぐちを「私」が聞いているのではないかとしたことであって、「私」も一緒に悪ぐちを言っていると考えているわけではない。

問4 夫婦を見送っている「私」の心情について答える問題

汽車に乗って去って行く夫婦を見送る場面、「私」は二人が「似合いの

夫婦に見えた」と感じている。これは、「莫迦莫迦しい」ほどの大声で別れを告げる「男」の様子と、「女優めいた恰好(かっこう)」「おそらく演技をするような大袈裟(おおげさ)でわざとらしいそぶりといった意味であろう(139・140行目)」。また、夫婦が汽車に乗る前の場面でも、「長つたらしい挨拶」をする「女」の様子と、「同じように、糞丁寧な挨拶」をする「男」の様子を見て、「なにか夫婦の営みの根強さというもの」を感じている(139・140行目)。

以上の内容を踏まえた説明になっている選択肢が正解だということはおわかりだろう。ただし、どの選択肢も本文の最後の場面だけではなく、そこに至るまでの「私」の心情などについても言及したものになっている。したがって、各選択肢を丁寧に検討しながら正解を選ぶ必要がある。

① 二人が「似合いの夫婦に見えた」(本文末)ということに触れている点は正しいのだが、「私」が夫婦の事情を知って「人生のはかなさや空しさ」を感じているということを感じさせるような記述は、本文中にない。したがって、この選択肢は正解にはならない。

② 「私」が「二人に対してそれなりに同情の念を抱くようになって」いたかどうかも本文から確定しがたいが、それ以上に、「すべてがくだらないことであるようにも感じられ」が、本文から読み取れない内容。「苦々しい気分になっている」も、最後の場面での「私」の心情にそぐわない。

③ 「私」が「夫婦に何らかの忠告でもしてやろうと思っていた」ということを裏づけるような記述は、本文中にない。

④ 「女」は「私」を前にして幾度も夫の悪ぐちを言っており、しかもその口ぶりには「夫が私の機嫌をとる様子は、むく犬の尾が顔にあたってみたいで、気色が変わるうてわるうてかきません」(50行目)などかなり大袈裟である。「男」の方も妻の悪ぐちを言っているが、彼も「妻のことは警戒せなあきまへんぜ」などと「大袈裟な言い方」をしている(84・85行目)。したがって、「互いに大袈裟な物言い相手の悪ぐちを言う夫と妻」は正しい説明である。また、「その不躰(ぶしつぽ)な(＝無作法な・無礼な)態度に不快も覚えた『私』」というの、「むかむかッとして来た」(17行目)や「いざさかきれた」(85行目)などの記述に注目できれば、正しい説明だとわかる。さらに「二人が似たもの夫婦とも呼べそうな存在であり、そ

れなりに気持ちを通じ合わせているのかも知れない」と感じたというの
も、右に確認した最後の場面での「私」の心情や、93行目の「案外あの夫
婦者はお互い熱心に愛し合っているのではないか」という記述に合致して
いる。そして「夫婦というものの不思議なありようといったことに思いを
めぐらせている」も、140行目の「なにか夫婦の営みの根強さというものを
ふと感じた」という表現に即した説明だと考えられる。以上のことから、
この④が正解だとわかるだろう。

問5 「私」の人物像について答える問題

それぞれの選択肢について、本文と照合しながら検討してみよう。

- ① 「相手に強く出られると、何も答えられず卑屈になってしまふ」が誤り。
たしかに「私」は夫婦から何かを問われても言葉を濁すなどしているが、
それは、答えられなかったからではなく「答えたくもなかった」(9行目)
からであり、「女の言うことも男の言うことも、てんで身を入れてきかな
い覚悟をきめていた」(117行目)からである。しかも「私」は、「卑屈」に
なったりもしていない。

- ② 「困っている人に対してはつい手を差しのべてしまふ」がおかしい。夫
婦が「困っている」かどうかも本文から確定できないが、それ以上に、
「私」が夫婦に「手を差しのべて」いる様子を描いたような場面も、本文
中にはない。

- ③ 「世間の風潮といったものからは距離を置く」は、「なにかと言えば教養
だとか、筆蹟だとか、知性だとか、月並みな符号(Ⅱありきたりな言葉)
を使って人を批評したがる」女性が多いという「近頃」の傾向に「うんざ
り」している「私」(17・18行目)のありようを説明したもの。「他人が自
分のなかに立ち入ってくることも好まない」も、他人から「自分の恋人
や、夫についての感想」などを求められることを嫌う様子(9・10行目)
に即した説明である。そして「私」は、二人のことを思い出して「案外あ
の夫婦者はお互い熱心に愛し合っているのではないか、などと考えて」み
たり(93行目)、二人の様子から「なにか夫婦の営みの根強さというもの」
を感じたりしている(140行目)のだから、「周囲のことを冷静な眼で見つ
めるという面ももっている」というのも正しい説明だということができ

る。したがって、この④が正解である。

- ④ まず、「私」が「意志の弱」い人間だというのが間違いない。「私」は、不快
な質問に対しては「露骨にいやな顔をしてみせ」ているし(10行目)、夫
婦の言うことを「てんで身を入れてきかない覚悟をきめ」る(117行目)な
どもしており、むしろ意志の強い人物だといえる。しかも、「私」が「屈
託した(Ⅱよくよくよと悩む)日々」を送っているというのも、本文から読
み取れない内容である。

問6 本文中の表現やその効果などについて答える問題

前問と同様、各選択肢を本文と照合しながら検討していこう。

- ① 20行目で「女」は、「私」が「皮肉」を言ったにもかかわらず、「顔色も
声の調子も変えなかった」。また124行目では、「私」に向かって自分は不幸
な女だと訴えているにもかかわらず、その視線は「私」の方に向けられて
おらず、「あらぬ方へそれている」。いわば彼女には、何を考えているのか
わからないようなところがあるわけであり、そうした「女」の様子を目的
当たりとした「私」が、彼女のことを「得体の知れないところをもつ存
在」だと感じるのには当然であろう。したがって、①は正解である。

- ② 「むく犬の尾が顔にあたったみたい」という表現を「擬人法」としてい
る点が誤り。擬人法とは、たとえば「風がささやく」といった表現のよう
に、人間ではないもの(Ⅱここでは「風」)を人間になぞらえた言い方の
ことをいう。しかし「むく犬の……」という表現は、人間のありよう(Ⅱ
「男」が妻の機嫌をとる様子)が動物のありようにたとえられているのだ
から、擬人法ではない。

- ③ たしかに「私」のことは「ふわりふわりからだを浮かせている」と描写
されているが、だからといって、これが「定職にも就かず無為な日々を送
らざるをえなくなっている「私」の姿」を表しているかといえれば、そうし
たことを裏づけるような記述は本文中にない。そもそも「私」は、リード
文によれば、病気のために「医師から転地療養を勧められ」て温泉に来て
いるのだから、そうした「私」のことを「定職にも就かず無為な日々を
送」っていると評するのも間違いである。

- ④ 「男」が「女」に対してつねに高圧的な態度をとっている」が間違い。

「男」は妻と「私」が散歩しているのを目撃したときに「逃げるように立ち去って」いるし(61・62行目)、「女」によれば、妻である自分の機嫌をとることも多いのである(48～51行目)。

問7 本文についての批評や感想として正しいものを選ぶ問題

本文についての「批評や感想」が問題になっているのだから、単に本文のあらすじや内容といったことだけでなく、小説世界がどう描かれているかといったことも考慮しながら、選択肢を検討してみよう。

① 三人の登場人物の内面を「それぞれの視点から」描き出しているというのが、間違った説明である。この小説の世界は一貫して「私」の視点から描かれており、「女」やその夫については、「私」にはこのように見えた」といった描かれ方しかされていない。したがって、「女」やその夫の内面が彼らの視点から描かれているというのは誤りである。

② 「私」が次第に「女」に「心惹かれて」いったというのが、本文から読み取れない内容。かりに「心惹かれ」という表現を(興味をもつ)といった意味に解釈したとしても、「私」が「そうした自分の気持ちをもてあまして苦悩している」というのは誤りである。

③ 「私」が「自分の心情を『女』に投影している(＝投げかけ、重ね合わせる)」というのが、本文から読み取れない内容。しかもこの選択肢の内容にしたがえば、「私」も「女」も「温泉宿で無為な日々を過ごすことしかできずにいる」ということになり、とくに「女」が子供をほしくて温泉に来ていることを考えれば、明らかにおかしい説明だといえる。

④ 『女』の奇妙な振る舞いはあちこちに描かれており、それを不思議そうに見ている「私」の様子も描かれているのだから、そうした「女」の振る舞いが読み手の「印象に残る」といえるだろう。そして「私」は、そうした「女」のことを不快で迷惑だと感じながらも、彼女と散歩することを断ることもできず(6行目)、彼女が部屋に不意に入ってきたときにもその話につき合い、あげくのはては彼女に目の前で泣かれ、「どういう風に慰めるべきか」困惑している(126・127行目)。したがって、本文に『女』に振り回されている『私』の姿が描かれているというのにも、間違った説明ではない。以上のような理由で、この④が正解である。

第1回

2027
共通テスト
直前対策問題集

第1回

国語

sample

1 第1回

設問 (配点)	第3問 (20)					第2問 (45)								第1問 (45)										設問 (配点)		
	問4	問3	問2	問1	問6	問5	問4	問3	問2	問1			問6	問5	問4	問3	問2	問1								
										(ウ)	(イ)	(ア)						(ii)	(i)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)		(ア)	
第3問 自己採点小計	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	解答番号
	③	②	②	③	①	④	③	⑤	③	②	②	①	①	④	③	③	⑤	①	③	③	②	①	①	④	②	正解
	4	4	4	4	4	4	4	8	7	6	7	3	3	3	4	4	7	7	7	6	2	2	2	2	2	配点
																										自己採点

【解答・採点基準】
(90分 200点満点)

設問 (配点)	第5問 (45)										第4問 (45)							設問 (配点)
	問7	問6	問5	問4	問3	問2	問1			問3			問2	問1				
							(ウ)	(イ)	(ア)	(iii)	(ii)	(i)		(ウ)	(イ)	(ア)		
第5問 自己採点小計	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	解答番号	
	⑤	②	②	③	①	③	④	①	⑤	②	④	②	④	③	④	①	正解	
	8	5	6	5	6	6	3	3	3	7	8	8	7	5	5	5	配点	
																	自己採点	

※の正解は、順序を問わない。

第3問 現代文（実用的文章）

【資料の要旨】

【資料Ⅰ】 A 高校新聞

1995年の阪神淡路大震災以降、災害援助としてのボランティアの存在が注目されるようになった。その理由は行政の援助より、ボランティアの方が眼前の状況に対応する機動性が高いからである。NPO法など、法律においてもこうしたボランティアを支える仕組みが作られているし、中央教育審議会などもボランティア活動の、教育における推進を提言している。そのような中で、各学校でも地域の状況に即した取り組みが行われている。この新聞記事は、以上のことを客観的に伝えたものである。

【資料Ⅱ】

【資料Ⅱの1】 A高校のアンケート

A高校の200人を対象にした、ボランティア活動の経験の有無についてのアンケート結果を、棒グラフで示したものである。6割がボランティア経験がないと答えている。

【資料Ⅱの2】 NHKによる「中学生・高校生の生活と意識調査」（2012年）

上段には高校生に対する望ましい生き方についてのアンケート結果が示されている。「社会のことを考える前に、まず自分の生活を大切にすること」という自分の生き方を第一とする考え方が7割以上を占めている。

下段は、高校生の「生活目標」を尋ねているが、「身近な人たちと、なかなか毎日を送る」、「その日その日を、自由に楽しく過ごす」といった回答が多い。

【資料Ⅱの3】 ボランティア総人数

1984年～2009年までのボランティアの人数の増減を折れ線グラフで示したものの、2004年まではボランティアの人数は増加していたが、2004年を境に減少している。ちなみに2004年は、観測史上最多となる10個の台風の上陸により、全国各地で水害、土砂災害、高潮災害などの自然災害が発生した年であるが、そのことと人数の増減の関係は不明。

【資料Ⅲ】ボランティアを知ろう！

ボランティアの概要とその意義について述べた記事である。その要点は以下の三つにまとめることができる。

- a ボランティア活動は地域や社会をよりよくすると同時に、自分自身をも豊かにしてくれるものである。
- b ボランティア活動は強制的義務的なものではなく、自らが主体的に参加するものである。それゆえ人の心に働きかける力があり、既成の仕組みや発想にとらわれることなく、自分で何が必要とされているかを考え実施することができる創造的な活動である。
- c ボランティア活動は、金銭や自己満足を目的とするものではないが、感動や充実感、社会や自分に対する新しい気づき、多様な人々とのつながりなど、得るものは大きい。

【設問解説】

問1 「レポート」の空欄に入る語句を答える問題

設問文に、「資料Ⅱ」の三つの図表についての説明が入る」と書かれていることをまず確認しよう。「資料の要旨」にも書いたが、A高校では6割の生徒がボランティア経験がない。

NHKの高校生の意識調査では、高校生は「社会のことを考える前に、まず自分の生活を大切にすることを望んでおり、高校生の「生活目標」としては、「身近な人たちと、なごやかな毎日を送る」、「その日その日を、自由楽しく過ごす」という回答が多い。

A高校のアンケートとNHKの調査結果をまとめると、日本の若者が、〈外部や社会よりも自分の身近な空間や人間関係の中で、楽しく自由に過ごしたい〉という考えをもっていると見える。これに最も対応する選択肢は①である。「社会のことを考える前に」自分の生活を考えるのだから、「社会をよくすることより、自分の生活を「優先」している」と見える。よって①が正解。

② 少し迷うが、NHKの調査にある「身近な人たち」が「友だち」であり、「友だちとのつきあい」が「第一」だと「考え」ているとは断定できない。「自分はそうだ」というような主観を交えた読解はしないように。

③ たしかにNHKの調査においては、「自由に楽しく過ごす」という回答が多いが、この文言だけから、「自由という価値を絶対化し、それが脅かされるのを嫌忌する」というように、「自由」という価値を特別視しているとは断定できない。「なごやか」、「楽し」といった価値も挙げられているからである。

④ 多くの高校生が「なごやかな毎日を送る」とことや「自由に楽しく過ごす」という項目を「生活目標」として選んでいるのだから、「生活自体が幸福や楽しみと結びつくものではない」という意識が強い」とは言えない。たしかに現実はそのようではないから、楽しく過ごすことを「目標」にしているのだと考えられなくもないが、「目標」にすることは、それが可能だと考えるからであり、「生活自体が幸福や楽しみと結びつくものではない」という「生活」自体への否定的意識があるとは断定できない。

問2 「レポート」の空欄に入る語句を答える問題

設問文にあるように、空欄 Y には「資料Ⅰ」の内容をまとめたものが入る。ただ「資料Ⅰ」には、大別すると、a 〈ボランティアの機能に対する評価〉、b 〈法律や教育によるボランティアの推進〉という二つの事柄が書かれている。そのどちらが空欄 Y に適当かを決めるには、空欄 Y の文脈を確認しなければならぬ。空欄 Y の部分は「Y」というあり方が、ボランティアの本来の姿だと考えるのは、ボランティア活動の意味を失わせる可能性がある」と書かれている。つまり Y には、アユミさんの視点から考えると「ボランティア活動の意味を失わせる可能性がある」と否定的な内容が入ることがわかる。a は〈ボランティアの機能が評価されている〉という内容であるから、そこに「ボランティア活動の意味を失わせる」要素があるとは考えられない。また Y は、「資料Ⅲ」について述べる最終段落につながる部分にある。ボランティアが「資料Ⅲ」に書かれているように、「自分の意志で行う」ものであり、「誰かに強制されたり、義務で行ったりするものではなく、自分の考えで参加したり、取り組むもの」だとするなら、学校が教育として積極的にボランティア活動を推進するのは、生徒の主体的な行為とは異なり、「義務」としてそれを行わせることになる可能性がある。つまり先の b の内容が、「ボランティア活動の意味を

失わせる」要素になり得るのである。

そうした観点から、選択肢を見ていくと、ボランティアを「社会が青少年に」「強制」するという②が、bの孕む否定的側面を説明している。よって正解は③である。

① たしかに災害は「一刻を争う」ものだろうが、もし学校が生徒にボランティアをさせる際には、生徒の身が危なくなるような緊迫した状況で活動させることはしないだろうし、そもそもボランティアは、そうした危険性が高くない状態において行うものであるから、①のようなことは起こりにくい。つまり①はそもそもボランティアのあり方から外れる例外的な事態であり、それを「ボランティア」の一般的なあり方であるかのように説明し、否定的に言うのは、正しい指摘ではなくなってしまい、「レポート」自体を損なうことになる。またこうした点をアユミさんが問題視していると考えられる根拠もない。

② 【資料Ⅰ】では、「(行政よりも) 目の前の出来事に集中できる」ことはボランティアの機能として肯定的に書かれている。またそれが「全体を見よう」としないことにつながったとしても、「全体」を見ることは「行政」の領域であり、「ボランティア活動の意味を失わせる」ことにはならない。また①同様、こうした点をアユミさんが問題視しているとは考えられない。

④ ボランティア活動が、「政府や公共の機関が自らの職務を民間に依存し、てしまう」ことになるとは言えない。なぜなら【資料Ⅰ】では「行政」とボランティアは領域を棲み分けているからである。そしてそれゆえ「ボランティア」が意味をもつのだし、④のようなことを「ボランティア活動の意味を失わせる」ことだとアユミさんが思うと判断する根拠がない。

問3 【レポート】の空欄に入る語句を答える問題

空欄 Z には、設問文にあるように、「【資料Ⅲ】の内容と関連するものが入る」。

【資料Ⅲ】の内容については【資料の要旨】にも書いたが、以下のようなことであった。

a ボランティア活動は地域や社会をよりよくすると同時に、自分自身をも豊かにしてくれるものである。

b ボランティア活動は強制的義務的なものではなく、自らが主体的に参加するものである。それゆえ人の心に働きかける力があり、既成の仕組みや発想にとらわれないことなく、自分で何が必要とされているかを考え実施することができる創造的な活動である。

c ボランティア活動は、金銭や自己満足を目的とするものではないが、感動や充実感、社会や自分に対する新しい気づき、多様な人々とのつながりなど、得るものは大きい。

これらと選択肢を比較対照すると、②が a・c と合致する。「他人のためにするものである」というのは、a の「地域や社会をよりよくする」と対応する。よって②が正解。

① 「自分のしたいことだけを」という部分が、b の「自分で何が必要とされているかを考え」ることと食い違う。

③ ボランティアをした結果として「自尊心」を感じることはあるだろうが、「自尊心を自らが感じるために行う」というのは、「自尊心を自らが感じる」ことを目的としており、c の「自己満足を目的とするものではない」と食い違う。また【資料Ⅲ】の「自分のためでない／ボランティア活動は他の人や社会のために取り組むもの」だということにも反する。

④ 「他人に力を貸し感謝を受け取る」という説明だと、ボランティアにおいては、自分が主で、助けられる人間が従の立場にあり、「感謝」をもらうのは当然だというように述べているとも解釈できる。だとすれば、それは【資料Ⅲ】に「自分のためでない／ボランティア活動は他の人や社会のために取り組むもの」だと書かれていることと食い違うことになる。

問4 【レポート】の補足として適当なものを答える問題

「主張をより理解してもらうため」に補足する「論拠」として適当なものを二つ選ぶのだが、こうした設問は内容合致問題などと同じく、基本的には消去法で解くべきである。選択肢を一つひとつ見ていこう。

① 「ボランティアが行える環境を、具体的にどのように作っていくべきかを模索する」という表現は、たしかに「抽象的」である。だが「具体的にどのように作っていくべきかを模索」しようとする自分も含め皆に呼びかけているのに、自分が「思いついた」「具体例」を提示することは、「模索」し

ようと呼びかけていることと食い違いを生じさせることになりかねないし、「論拠や資料」としても妥当ではない。またアユミさんが「具体例」を提示することは、他の人の参考になるかもしれないが、他の人々が考えなくなるという逆効果をもたらすかもしれない。よって適切な「補足」とは言えない。

㉒ A高校の生徒がボランティアに参加しない理由を補足することは、「レポート」の「高校生のボランティア活動に対する意識は低いと考えられる」という記述の「論拠」にもなり得るし、「資料Ⅱ」の他の資料との関係などを示せる可能性もあるので、適切だと言える。よって㉒が「二つ目の正解」である。

㉓ たしかに「他の国と比べて」と書いてあるのに、それを示した資料がないというのは、「論拠」が薄弱であると言われる可能性は大いにある。「他国の若者のボランティア活動の状況がわかるように」、たとえば「他国と日本のボランティア活動への参加人数の推移を比較できるグラフを補足」するのは適切である。よって㉓が「二つ目の正解」である。

㉔ 自分の高校の新聞を「資料」としただけであり、「偏向(Ⅱ)考え方などがたよっていること」だと言われるとは考えられない。また問2で確認したように、アユミさんは答申の内容に対する批判的な考えを述べているが、「ボランティアは自発的なものだ」という第三者の書いた「資料Ⅲ」を「批判」の「論拠」として示していると言える。だから国にすり寄っているとも、国を根拠なく批判しているとも見られることはないと考えられる。それに「中央教育審議会に関する注記を補足」したとしても、それで「中立性」が確保されるのかも不明である。よって適切な「補足」とは言えない。

㉕ 「現代では、自分が他人にどのように思われているかを気にし、人から認められたいと思う人が多いことがボランティアを行う動機になっている可能性があると考え」たということ自体が「レポート」に書かれていないし、ボランティアをする人が少ないという「レポート」の内容と食い違う。よってそうしたことを補足する資料を今さら付け足す必要はない。

㉖ たしかに「資料の要旨」でも触れたように、2004年には豪雨による災害があったが、「ボランティアの人数が低下し」た原因が何であったの

かは、さまざま考えられ、どういう資料が妥当なのかも選択が難しい。しかも「資料Ⅱの3」は調査の結果を集計した客観性のあるデータである。低下の原因が示されていないからといって、データ自体の「信頼性が疑われる」わけではないだろう。それに「資料Ⅱの3」はボランティアの人数が低下したことが示されれば、「レポート」の論拠となるので、これ以上の資料を探す必要はないと言える。

2027
共通テスト
直前対策問題集

第3回

第3回

国語

Sample

1 第3回

第3問 (20)					第2問 (45)					第1問 (45)										問題 番号 (配点)												
問4		問3		問2	問1	問5		問4	問3	問2	問1	問6		問5		問4	問3	問2	問1					設問								
						(ii)	(i)					III	II	I	(ii)	(i)			(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)		解答番号							
第3問 自己採点小計	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2		1	第2問 自己採点小計	第1問 自己採点小計	正解	配点	自己採点	
	⑤	③	①	④	②	⑤	①	②	④	⑤	⑤	③	①	①	③	⑤	⑤	②	②	④	①	②	②	②	②	②						②
	5	5	3	3	4	8	6	7	7	7	5	5	3	3	3	4	4	6	6	6	2	2	2	2	2	2						2

【解答・採点基準】
(90分 200点満点)

第5問 (45)										第4問 (45)							問題 番号 (配点)										
問7		問6	問5	問4	問3	問2	問1			問3		問2	問1			設問											
							(ウ)	(イ)	(ア)	(iii)	(ii)	(i)	(ウ)	(イ)	(ア)		解答番号										
第5問 自己採点小計	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26		第4問 自己採点小計	正解	配点	自己採点						
	③	④	①	④	③	②	①	①	③	③	④	②	⑤	①	③	②	③					④	②	⑤	①	③	②
	7	5	7	6	5	6	3	3	3	3	8	8	8	6	5	5	5					8	8	8	6	5	5

※の正解は、順序を問わない。

第4問 古文

〔出典〕

〔文章Ⅰ〕

『古本説話集』

成立 平安時代末期～鎌倉時代初期

ジャンル 説話

編者 未詳

内容

上下二巻からなり、上巻には世俗説話が四十六話、下巻には仏教説話が二十四話収められている。また上巻では、和泉式部、清少納言、紀貫之、藤原公任など平安時代を代表する人々の和歌説話が多く並べられており、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』などの勅撰和歌集、『大鏡』『栄花物語』などの歴史物語、その他『大和物語』『枕草子』『和泉式部日記』など平安時代の有名出典と類話関係を持っている話が多い。下巻は、観音を中心とした利生、靈験譚が中心となっている。また、『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』などと共通の説話を多数含んでいる。

なお、本文は、新日本古典文学大系42『宇治拾遺物語 古本説話集』（三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注 岩波書店刊）によったが、問題文としての体裁を整えるために、表記を改めている。

〔文章Ⅱ〕

『源氏物語』

成立 平安時代中期

ジャンル 作り物語

作者 紫式部

内容

五十四帖からなる長編物語。主人公、光源氏の生涯を中心に、光源氏亡き後の子や孫に至るまでの七十年余りの出来事が綴られている。後世の文学や芸能に絶大な影響を与えた日本文学の最高峰と称されている作品である。

なお、本文は、新編日本古典文学全集20『源氏物語①』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳 小学館刊）によったが、問題文としての体裁

を整えるために、表記を改めている。

〈問3で引用した文章〉

『源氏積』

成立 平安時代末期

ジャンル 注釈書

作者 藤原伊行ふじわらのこれゆき

内容 現存する最も古い『源氏物語』の注釈書。後の『源氏物語』の注釈

書にも大きな影響を与えたとされている。

なお、本文は、源氏物語古注集成 第16巻『源氏積』(渋谷栄一編纂 おうふう刊)によったが、問題文としての体裁を整えるために、表記を改めている。

【全文解釈】

【文章Ⅰ】

① 今となつては昔のことだが、平中という色好み(の男)が、たいそういいしく思う女で若く美しかった女を、妻の所に連れてきて(自分のもとに)置いた。妻が、憎らしい事々を言い続けるうちに、(女を)追い出した。(平中は)この妻に従つて、「(女のこと)とてもいいらしい」とは思うけれど、引きとめることができない。(妻が)荒々しく言ったので、(平中は女の)近くにさえも寄ることができない。(妻が)荒々しく言ったので、(平中は女の)近くにあなたとの仲が思いがけないことであることよ。(これからあなたが)どのようにして過ごしなさるとしても、(私のことを)忘れないで手紙も寄越してください。私もそう(しようと)思うので」など(平中は女に)言った。この女は包みなどに物を入れ整理して、(人に)車を取りに行かせて待つ時である。「たいそうしみじみと悲しい」と思った。そうして(女は)出て行ってしまった。しばらくして(女が平中に)寄越した(歌は)、

(私のことを)忘れないでな。 (私はあなたのことを)忘れてしまふか、いや、忘れてしまわなかつた。 春霞が今朝立つ中で、立ったまま(あなたが私に)約束したことを。

② この平中は、それほど強い関心を持っていない女の所でも、声に出して泣

けないことを、うそ泣きをし、涙で(顔を)濡らすようなために、硯瓶に水を入れて紐をつけて、肘にかけて歩きまわっては、顔や、袖を濡らした。客間の方を、妻が、のぞいて見ると、(平中が)棚に物を置いたので、(平中

が)出て(から)後、(妻がそれを)取り下ろして見ると、硯瓶である。また、畳紙に丁子が入っていた。(妻は)瓶の水を注ぎ捨てて、墨を濃くすつて入れた。鼠の糞を集めて丁子と入れ替えた。そうしてもどのように置いた。いつものことであるので、(平中は)夕方(硯瓶と畳紙を持って、女の所に)出ていった。夜明け前に帰って、気分が悪そうに唾を吐き、横になった。(畳紙の(中)に入れた)鼠の糞のせいであるようだ」と(思つて)妻は横になって聞いている。夜が明けて(平中が)見ると、袖に墨がひどく付いている。鏡を見ると、顔も真っ黒で、目だけきらきら光って、自分でもたいそう恐ろしい様子である。硯瓶を見ると、墨をすつて入れてある。畳紙に鼠の糞が入っている。たいそうたいそう驚きあきれほど情けなくて、その後、(硯瓶の水を)うそ泣きの涙(として)付けることや、丁子を(口に)含むことを、やめてしまったということだ。

【文章Ⅱ】

(姫君は)絵など描いて色を付けなされる。いろいろとおもしろく気の向くままに描き散らしなされた。源氏自身も描き添えなされる。髪がたいそう長い女を描きなざつて、鼻に紅を付けて見なされると、絵に描いても見苦しい様子をしている。(源氏は)自分自身の御姿が鏡台に映っているのが、たいそう美しいのを見なざつて、自分の手でこの紅を描き付け、赤く染めてご覧になると、このようにすばらしい顔でさえ、こうして(赤い鼻が顔の一部に)混じっているようなことは見苦しいに違いなかった。姫君が、見たいそう笑いなさる。(源氏が)「私が、このように変な顔になったとしたらその時は、どうであらうか」とおっしゃると、(姫君は)「いやだらう」と言つて、そのようにも染み付くのだらうかと気がかりに思いなざつて。 (源氏は)拭き取るふりをして、「まったく白くならない。つまらない遊びごとであるなあ。帝におかれてはどのようにおっしゃるだらうか」と、たいそうまじめにおっしゃるので、(姫君は)たいそう気の毒だとお思いになって、近寄って拭いなざると、(源氏が)「平中のように色を付け加えなされるな。赤いような

のはまだ我慢しよう」と戯れなさる様子は、たいそう好ましい兄妹のように見えなさる。

〈問3で引用した文章〉

女君に、(源氏が)鼻に紅を付けて見せるところで、御硯の瓶の水で紙を濡らして拭いなさって、平中のように色を付け加えなさるところ、

平中が契りを結ぶどの女にも(別れを惜しんで)泣く様子を見せようと思つて、硯の瓶に水を入れて目を濡らしたが、女は、察して、その瓶に墨を入れていたのを、(平中は)知らないでいつものように顔に付けて帰つたのを(女が)見て、

私には薄情な様子をあなたは見せるけれども、他の女の所には足繁く通つて、愛情のあることを示す別れを惜しむ涙を流していることが、墨が付いているあなたの顔の様子からわかることだよ。

【設問解説】

問1 語句解釈の問題

(ア)

形容詞 シク活用 「いみじ」 連用形ウ音便	形容詞 ク活用 「らうたし」 終止形
いみじう	らうたし

ポイントになる語は「いみじう」、「らうたし」である。

- 「いみじ」
- 1 はなはだしい。
 - 2 すばらしい。立派である。優れている。
 - 3 ひどい。情けない。恐ろしい。悲しい。

- 「らうたし」
- 1 かわいらしい。いじらしい。いとおしい。

「いみじう」は、直下の「らうたし」を修飾しているので、前記1の意で、①「たいそう」、②「とても」、④「ひどく」が該当する。「らうたし」の意味は、②「いじらしい」が該当する。よって②が正解である。

文脈を確認すると、平中が連れてきた女を、妻が追い出すが、平中は追い出される女のことを「とてもいじらしい」と思いながらも、引きとめることができな、というのである。よって②は文脈にも合っている。

(イ)

形容詞 ク活用 「心憂し」 連用形	接続助詞
心憂く	て

ポイントになる語は「心憂く」である。

- 「心憂し」
- 1 つらい。情けない。心苦しい。
 - 2 いやだ。不快だ。

「心憂く」は、前記より③「情けなく」だけが該当する。よって③が正解である。

文脈を確認すると、硯瓶には墨が、畳紙には鼠の糞が入っていたことを平中が知つて、たいそう驚きあきれほど「情けなくて」、その後はうそ泣きの涙として硯瓶の水を付けたら、口臭消しのために畳紙に入れた丁子を含んだりすることをやめた、というのである。よって③は文脈にも合っている。

(ウ)

副詞	係助詞	動詞	助動詞
	強意	ラ行変格活用	推量
うたて	こそ	「あり」	「む」
	あら	未然形	已然形
			め

ポイントになる語は「うたてあら」、「め」である。

「うたてあり」〔連語〕

1 不快だ。いやだ。気分が悪い。

* 副詞「うたて」にラ行変格活用動詞「あり」が接続したもの。

「む」

1 〈推量〉くだろう。

2 〈意志〉くしよう。くしたい。

3 〈適当・勧誘〉くのがよい。くではどうか。

4 〈假定・婉曲〉くたら。くような。

* 4は、「む+体言」、「む+助詞」、「む+」のような形で、「む」が連体形で文中に用いられる時。

「うたてあら」は、①「いやだ」だけが該当する。「め」は推量などの助動詞で、ここでは強意の係助詞「こそ」の結びになっている。直前の「かくかたはになりなむ時、いかならむ」を受けての返事であるから、この「め」は前記1の推量である。よって①が正解である。

文脈を確認すると、自分の鼻を紅花で赤くし、「こんな変な顔になったらどうだろうか」と言う源氏に対し、姫君が「いやだろう」と言って、そのまま紅が染み付いてしまうのではないかと心配している、というのである。よって①は文脈にも合っている。

問2 語句と表現に関する説明の問題

a

動詞	助動詞	終助詞
ラ行四段活用	尊敬	禁止
「忘る」	「る」	
未然形	終止形	
忘ら	る	な
忘れ	なさる	な

「る」の識別

1 自発・受身・可能・尊敬の助動詞「る」の終止形

* 四段活用動詞・ナ行変格活用動詞・ラ行変格活用動詞の未然形に接続する。

* 「自発」は心情語や知覚動詞に付くことが多い。

* 「受身」は「く」などの、受身の対象が文中にあるか、補える。

* 「可能」は打消や反語表現を伴うことが多い。

* 「尊敬」は貴人の動作に用いられることが多い。

2 完了・存続の助動詞「り」の連体形

* 四段活用動詞の已然形(命令形)・サ行変格活用動詞の未然形に接続する。

3 活用語の活用語尾や、活用語の一部

* 「る」を含めて、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞などの活用語になる場合。

終助詞「な」

1 (禁止)くな。くてくれるな。

* 活用語の終止形(ラ変型活用語には連体形)に接続する。

2 (詠嘆)くなあ。くであるよ。

* 文末に接続する。

①が「な」は詠嘆の終助詞」とすることに、その正誤を文法的には判断できない(後述)ので、内容から判断する。aは、直前に、

さて出でにけり。とばかりありておこせたる(Ⅱそうして女は出て行ってしまった。しばらくして女が平中に寄越した歌は)

とあるので、家を出て行った女が平中に寄越した和歌の初句であることがわかる。古語の「忘る」には四段活用と下二段活用があるが、ここでは「忘ら」という形なので、四段活用の未然形である。よって、その直後の「る」は前記「る」の「識別」の1となり、終止形なので、前記「終助詞「な」」の1か2かの判断は接続からはできない。内容を考えると、「忘らるな」の対象は、下の句の「けさ立ちながら契りつること」で、女が家を出る時に平中が屏風に寄りかかって立ったまま言った、「忘れて消息もし給へ。おのれもさなむ思ふに」という約束のことである。「忘れて」の「で」は打消の接続助詞、「消息もし給へ」の主体は、「給へ」が尊敬の補助動詞「給ふ」の命令形なので「あなた(Ⅱ女)」、「さなむ」の「さ」は「消息をもし」のことである。よって、約束した内容は、「あなたは忘れないで手紙も寄越してください。私も手紙を書こうと思う」ということになる。女は、この約束を忘れず和歌を送ってきたのだから、aの「忘らるな」の主体は「あなた(Ⅱ平中)」ということになる。主体を「あなた」として「忘らる」の「る」の意味を考えると次のようになるが、

- あなたは自然と約束を忘れる ↓「る」を自発とする場合
- あなたは誰かに約束を忘れられる ↓「る」を受身とする場合
- あなたは約束を忘れることができる ↓「る」を可能とする場合

これでは直前までの文脈と合わないのので、「る」を尊敬として「あなたは約束を忘れなざる」とするのがよい。そうすると、「忘らるな」の「な」を詠嘆の終助詞として、「あなたは約束を忘れなざるのだなあ」とすると意味が通らない。「な」を禁止の終助詞として、「あなたは約束を忘れなざるな」と解釈しなければ、二句の「忘れやしめる(Ⅱ私は忘れてしまいか、いや、忘れてしまわなかった)」につながらず、追い出された女が平中の約束を促すためにこの和歌を送った状況にも合わない。これによって、①は、「な」は詠嘆の終助詞」とする点は間違いであり、内容の説明を「若い女が平中に捨てられた自分の身の上を嘆いている」としている点も明らかに間違っている。

る。

名詞	格助詞	名詞	格助詞	名詞	助動詞
豊紙	の	物	の	故	断定
の		の		せい	「なり」
				である	連体形撥音無表記
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞
					推定
					「めり」
					終止形
					助動詞

ントである。前記のとおり、「めり」はラ変型活用語の連体形に接続する場合、直前のラ変型活用語の語尾が撥音便化し、無表記になることを踏まえると、「なるめり」が「なんめり」と撥音便化し、「なめり」と無表記になったものと考えることができる。この「な」を伝聞推定の助動詞とするならば前記「なり」の三つ目の*にあるように接続が合わない。名詞「故」の直下にあるので断定の助動詞である。前記のとおり「めり」は視覚によって推定する助動詞なので、「平中の苦しむ声^を聞いて、その原因を妻が推測する様子を表している」という内容の説明も間違いである。

c

副詞	動詞	助動詞	助動詞
	ラ行四段活用	存続	婉曲
	「混じる」	「り」	「む」
	已然形	未然形	連体形
さて	混じれ	ら	む
こうして	混じっ	ている	ようなこと

「らむ」の識別

- 1 現在推量の助動詞「らむ」
*活用語の終止形（ラ変型活用語には連体形）に接続する。
- 2 完了・存続の助動詞「り」の未然形＋推量などの助動詞「む」
*四段活用動詞の已然形（命令形）・サ行変格活用動詞の未然形に接続する。
- 3 活用語の未然形活用語尾（その一部）「ら」＋推量などの助動詞「む」
*未然形が「ら」で終わる語には、ラ行四段活用動詞・ラ行変格活用動詞（ラ変型活用語）・形容詞（形容詞型活用語）・形容動詞（形容詞型活用語）などがある。

「む」

【設問解説】問1(ウ) 参照。

◎は「らむ」は現在推量の助動詞とするのが文法的に誤りである。動詞としては、ラ行四段活用の「混じる」とザ行下二段活用の「混ず」があるが、ザ行下二段活用の活用は「混ぜ・混ぜ・混ず・混ずれ・混ぜよ」で、cの「混じ」の形はない。ここは、「混じれ」で、ラ行四段活用動詞の已然形（命令形）である。よって、前記「らむ」の識別の2より、この「らむ」は完了・存続の助動詞「り」の未然形に推量などの助動詞「む」が接続したものであるとわかる。「む」は直下に助詞「は」があることから「仮定・婉曲」である（問1(ウ)参照）。全体の意味は「こうして混じっているようなこと」となる。また、「源氏が今まさに赤い色の付いた自分の鼻を見ている」というのは、「文章II」の「手づからこの紅花を描きつけ、にははして見給ふ」の部分に書かれているので、間違いとはいえない。

d

動詞	動詞	助動詞
八行四段活用	八行四段活用	存続
「思ふ」	「給ふ」	「り」
連用形	已然形	終止形
思ひ	給へ	り
思い	なさつ	ている

「給ふ」

- 1 「与ふ」の尊敬語「お与えになる。くださる。」
 - 2 「尊敬の補助動詞」ゝなさる。
 - 3 「謙讓の補助動詞」ゝ（ており）ます。
*1・2は八行四段活用で、3は八行下二段活用。
- 「り」
- 1 （完了）ゝた。ゝてしまふ。ゝてしまった。
 - 2 （存続）ゝている。ゝていた。
- *四段活用動詞の已然形（命令形）・サ行変格活用動詞の未然形に接続する。

「敬意の方向」

- 1 「誰から」敬意を表しているか。
- ① 地の文……書き手（作者）から。
- ② 会話文……話し手から。
- * ①・②とも尊敬語・謙讓語・丁寧語の区別は関係ない。
- 2 「誰へ」敬意を表しているか。
- ① 尊敬語……動作の主体へ。
- * 「誰が」その動作を行っているかを考える。
- ② 謙讓語……動作の受け手へ。
- * 「誰に」その動作を行っているか、あるいは「誰を」相手にその動作を行っているかを考える。
- ③ 丁寧語……読み手（読者）・聞き手へ。
- * 地の文では読み手（読者）、会話文では聞き手へ。

④は「給へ」は下二段活用の謙讓の補助動詞とするのが文法的に誤りである。「給へ」の直下の「り」は完了・存続の助動詞「り」の終止形であるので、四段活用動詞の已然形（命令形）かサ行変格活用動詞の未然形にしか接続しない。よって下二段活用には接続しないので、「給へ」は前記2の八行四段活用の尊敬の補助動詞「給ふ」の已然形（命令形）である。敬意の対象を考えるためには、動作の主体を確認する必要がある。ここでは光源氏の鼻に付いた赤色が染み付くだろうと「あやふく思」うという動作の主体は姫君である。よって、前記「敬意の方向」より「給へ」は作者から姫君に対する敬意を表しているので、「源氏に対する敬意」というのも間違いである。

副詞	係助詞	動詞	助動詞
	敬意	マ行四段活用	打消
		「白む」	「ず」
		未然形	已然形
さらに		白ま	ね
まったく		白くなら	ない

「ね」の識別

- 1 打消の助動詞「ず」の已然形
- * 活用語の未然形に接続する。
- 2 完了の助動詞「ぬ」の命令形
- * 活用語の連用形に接続する。
- 3 ナ行変格活用動詞の命令形の活用語尾
- * ナ行変格活用動詞は「死ぬ」「往ぬ（去ぬ）」の二語のみ。
- 4 ナ行下二段活用動詞「寝」の未然形・連用形
- 5 ナ行下二段活用動詞の未然形・連用形の活用語尾

⑤が正解である。前記の品詞分解より、「ね」は係助詞「こそ」を受けて已然形であることがわかる。よって前記「『ね』の識別」の1より、「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形である。発言の直前に「そら拭ひをして」とあるので、光源氏は嘘をついていることがわかる。その嘘を「さらに」打消（まったく）ない」と全面的に否定し、その上強意の係助詞「こそ」で意味を強めているので、鼻に付けた紅の色がまったく取れないということを「大げさに言った」ということも適切である。

問3 「文章Ⅰ」「文章Ⅱ」の内容についての問題

授業で「文章Ⅰ」と「文章Ⅱ」について教師と生徒が話し合う場面が設定されている。それぞれの空欄に該当する本文の箇所を特定して読解し、その内容と選択肢とを吟味していく必要がある。

(i) 生徒Aが、「源氏積」と「文章Ⅰ」の相違点として「我にこそ」の和歌の有無をあげ、「この和歌はどんな意味なのでしょう」と言っていることに對して、教師から「掛詞」に注目してみるとよいというヒントを与えられ、生徒Bが和歌の意味を述べているのが、空欄Xである。

この和歌は、「源氏積」の説明によると、平中が契りをつなぐ相手に、別れを惜しむ涙を流しているかのように見せるために硯瓶の中の水を顔に付けるのだが、それを知った女が、水の代わりに墨を入れた。平中はそれを知らずに墨を顔に付けて帰って来たのを見て詠んだ女の和歌である。この女は

終助詞「な」

【設問解説】問2 a 参照。

「あへなむ」「連語」

1 我慢しよう。やむをえないだろう。

* 八行下二段活用動詞「敢ふ」の連用形に強意の助動詞「ぬ」の未然形、意志の助動詞「む」が接続したもの。

「あへなむ」は連語で、「我慢しよう」などと訳せる。このことから、源氏は鼻が赤くなったことを容認しているとわかる。よって「な」は、前記1の禁止の終助詞である。以上のことから、「平中のように色を加えなさるな。赤いようなのは我慢しよう」と解釈できる。では、平中のように色を加える、ということはどういうことか。『源氏積』では、「御硯の瓶の水に紙を濡らして拭ひ給ひて、平中がやうに色どり添へ給ふ」とある部分に対応している。つまり、『文章1』の、平中が硯瓶の水を付けることで顔が黒くなったという状況を踏まえて、硯瓶の水では平中と同じように黒い色を添えることになるので、それはやめてほしいと冗談を言ったのである。

全体をさらにわかりやすく解釈すると、次のようになる。

(赤くなった鼻に、さらに) 平中のように色を加え(て黒くし) なさるな。鼻が赤いようなのは(まだ) 我慢しよう。

以上のことから、選択肢を検討してみる。

①は、「帝も参内を許してくれるだろう」というのが、「あへなむ」の解釈として不適切である。また、顔が黒くなると「参内もできないので」というのも、本文からは読み取れない内容である。

②は、「硯瓶の水で顔を拭った」という部分が不適切である。「顔全体が真っ黒になってしまった」ということも起こっていないし、顔が黒くなることについて「赤い鼻のままでは見苦しくないからよいだろう」というのもまったく逆の内容である。

③が正解である。「赤い色が鼻に付いているだけならまだ我慢できるだろう」というのが「赤からむはあへなむ」の内容である。また「平中のように顔が黒くなる」というのが「平中がやうに色どり添へ」の内容で、「硯瓶の

水で顔を拭うのはやめてほしい」というのが、源氏の鼻を拭おうとした姫君の行為を禁止したものである。

④は、全体的に不適切である。「恥ずかしくて参内もできない」というのが、「あへなむ」の解釈として不適切である。また「誰なのがわからないようにしてほしい」というのも、本文からは読み取れない内容である。

2027
共通テスト
直前対策問題集

第5回

国語

第5回

Sample

1 第5回

設問 (配点)	第3問 (20)					第2問 (45)							第1問 (45)										設問 (配点)
	問4	問3	問2	問1		問7	問6	問5	問4	問3	問2	問1	問6	問5	問4	問3	問2	問1					
				⑤	②								(ii)	(i)					(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	
第3問	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
自己採点小計	④	①	②	※		④	①	③	④	②	①	④	③	①	④	①	③	③	②	④	②	④	②
	5	5	4	3	3	7	6	7	7	6	6	6	4	4	7	7	6	7	2	2	2	2	2

【解答・採点基準】
(90分 200点満点)

設問 (配点)	第5問 (45)										第4問 (45)								設問 (配点)
	問7	問6	問5	問4	問3		問2		問1	問4	問3	問2	問1						
					(2)	(1)	(イ)	(ア)		(iii)	(ii)	(i)	(ウ)	(イ)	(ア)				
第5問	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24		
自己採点小計	④	①	①	③	②	②	③	②	④	④	③	①	⑤	④	③	①	②		
自己採点合計	8	6	6	6	4	4	3	3	5	7	7	7	6	6	4	4	4		

※の正解は、順序を問わない。

第5問 漢文

【出典】

【詩】

鄭谷「十日菊」。鄭谷（八四二？～九一〇？）は晩唐の詩人。字は守愚、江西袁州（現在の宜春市）の人。光啓三年（八八七年）科擧に及第した。風景の描写や感情の表現に優れていたとされる。『三体詩』は、「さんたいし」または「さんていし」とも呼ばれ、全二十卷、『唐詩選』と並ぶ唐代の漢詩の選集として知られる。編者は、南宋の周弼。『三体』とは、漢詩の諸形式のうちの七言絶句・七言律詩・五言律詩の三形式を指す。『唐詩選』が、初唐・盛唐の詩を主として特に李白・杜甫の詩を多く収録しているのに対して、『三体詩』は、中唐と晩唐の詩を中心に収録していることに特色がある。「十日菊」は、「七言絶句」の部に収録されている。

【資料】

吳景旭『歴代詩話』。吳景旭（一六一一～没年未詳）は明末清初の詩人。字は又旦、または旦生、号は仁山。『歴代詩話』は八十卷からなり、『詩経』から明代の詩まで、旧説を集め、考証を加えた書物。本文は巻五十三「氣不長」から採った。

【本文解説】

第一句・第二句

重陽の節句の翌日九月十日の早朝、蜂はまるで人のように悲しんでいるようだが、蝶はまったくそれに気づかない風情で、前日と同じように菊の周りを飛び回っているという光景を描写する。

第三句・第四句

重陽の節句が終わると、人は菊を愛でることをしなくなるが、菊の香りは必ずしも一夜で衰えたわけではないと述べる。菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わってしまったからであり、菊の香りそのものは必ずしも変わっていないと感慨を述べて、合理性を欠く人の心を嘆いている。

【資料】

I 曾子固は「詩は言葉で言い終えてさらに意味に余韻が生じるようにさせる

べきである。古人が注意を払ったところはまさにそこである」と言い、鄭谷の「十日菊」を例として挙げた。

II 山谷は反対に鄭谷の「十日菊」は、個性が発揮されていないことに欠点があると考えた。「文章は個性を主とし、前漢の文学作品がすぐれている理由は著者の個性が発揮されているからである」と述べる。

III 世間の人が菊をじっくり見るときは、ただ菊の盛りの時期だけだ。盛りの時期には、菊を珍重するが、盛りの時期を過ぎると敬遠する。しかし盛りの時期とその後で菊に何か加わったり何か減じたわけではない。

【資料】 Iと【資料】 IIは「十日菊」に対する作品評が述べられており、【資料】 Iは曾鞏、【資料】 IIは黃庭堅の評価である。曾鞏が肯定的に評価しているのに対して、黃庭堅は欠点として「氣長せず」という点を挙げる。【資料】 IIIは明代の詩人何孟春（一四七四～一五三六。字は子元、号は燕泉）による「十日菊」評の一部である。世の人々の菊の鑑賞の傾向を述べるが、菊自体は変わらないと述べる。

【書き下し文】

【詩】

十日の菊
節去り蜂は愁ふるも蝶は知らず
自ら今日の人心の別なるに縁る
晩庭に還た折残せる枝を繞る
未だ必ずしも秋香一夜にして衰へず

【資料】

I 曾子固亦た云ふ、「詩は当に人をして一たび覽て、語尽くるも意余り有らしむべし。乃ち古人の心を用ふる処なり。『十日の菊』を詠むがときは是なり」と。

II 山谷反つて「十日の菊」を詠むを以て病ひは氣長ぜざるに在りと為す。因りて言ふ、「文章は氣を以て主と為す。西漢の文字の雄深雅健なる所以は、其の氣長ずるが故なり」と。

III 「人の菊を視るや直だ其の時に繋るのみ。其の時に当たれば則ち之を重んず。而も其の加はる所有るが為に非ず。其の時を過ぐれば則ち之を否む。而も其の損ずる所有るが為に非ざるなり」と。

【全文解釈】

【詩】

十日の菊

(九月九日の) 重陽の節句が過ぎてしまつて蜂はそれを悲しんでいるが蝶は気づかないで

明け方の庭で折れてしまつた菊の枝の辺りをまた飛び回っている

(菊の色香が九日と変わったように思えるのは) 当然今日(九月十日)になると人の心が変わつたからであり

菊の花の秋の香りは必ずしも一夜で衰えてしまつたわけではない

【資料】

I 曾子固はまた言う、「詩は、人に一たび読ませると、当然言葉が終わつても意味に余韻が生じるようにさせるべきである。そして(それが)昔の(立派な)人が注意を払つたところである。(鄭谷が)『十日菊』を詠んだようなことがそれである」と。

II 山谷は反対に(鄭谷が)『十日菊』を詠んだことについて欠点は個性が發揮されていないことにあると考へた。そこで言う、「文章は個性を主とする。前漢の文学作品が雄大で意味が深く上品で勢いがある理由は、その著者の個性が發揮されているからである」と。

III 「世問の人が菊をじっくり見る時は、ただ菊の盛りの時期に関わつていただけだ。菊の盛りの時期になれば菊を珍重する。しかし菊に何か増えたものがあるためではない。その(菊の盛りの)時期を過ぎてしまつたと敬遠する。しかし菊に何か減つたものがあるためではないのである」と。

【設問解説】
問1 詩の形式と押韻の問題

詩の形式については、近体詩である五言絶句・七言絶句、五言律詩・七言律詩の区別が問われることが多い。四句の詩であれば絶句であり、八句であれば律詩である。さらに一句内の字数が五字であれば五言と言ひ、七字であれば七言と言う。また古体詩である五言古詩・七言古詩の形式も覚えておこう。入試漢文においては、おおむね四句・八句以外の詩であれば古詩であると理解しておいてよい。【詩】の「十日菊」は、四句からなる七言の詩である

るから七言絶句である。したがつて、①・②「七言律詩」は不適当である。

押韻とは、おもに句末の文字の音の響きを揃へることであり、漢詩の場合には偶数句末の漢字音を揃へるのが大原則である。ただし七言絶句・七言律詩は、第一句末も押韻されることが多い。「十日菊」は七言絶句であるから、第一句末「知」(チ)・第二句末「枝」(シ)・第四句末「衰」(スイ)が押韻されている。よつて、正解は④。

問2 語の読みの問題

(ア)「所以」は「所以——」の形で用いて、「ゆゑん」と読み、「——(する)理由・原因・方法・手段・もの・こと」という意味になる。①「いかなる」は「何如なる」、②「いくばく」は「幾何」、③「ゆらい」は「由来」である。よつて、正解は②。

(イ)「直」は「直——耳」の形で用いられた時には、限定形の構文で「ただ——のみ」と読み、「ただ単に——だけだ」という意味になる。「耳」の直前にある「焉」は置き字である。「直」と同じ用法の語に「唯・惟・徒・但・特・只」があり、「耳」と同じ用法の語に「爾・已・而已矣」がある。①「よく」は「能・善」、②「みな」は「皆」、③「また」は「亦・又・復」である。よつて、正解は③。

問3 語の意味の問題

(1)「反」は副詞として「かへつて」と読み「反対に・逆に」という意味になる。また動詞として用いられる時には以下の用法がある。「はんす」と読むと「そむく・さからう」という意味になり、「かへる」と読むと「ひっくりかえる・もどつてくる」という意味になり、「かへす」と読むと「うらがえす・くつがえす」という意味になる。波線部は送り仮名から副詞「かへつて」の用法である。①「いつも」という意味の語は「常・恒・毎」、②「だから」という意味の語は「故・因」である。よつて、正解は②。

(2)「因」は副詞として「よつて」と読み「そこで・だから」という意味になる。名詞として「いん」と読み「由来・理由」などの意味になる。また動詞として「よる」と読み「よる・たよる」という意味になる。波線部は送り仮名から副詞「よつて」の用法である。①「しかし」という意味の語は

「然^{しか}・然^{しか}」③「そのまま」という意味の語は「遂^{つひ}」④「たとえば」という意味の語は「例^{たとへ}」である。よって、正解は②。

問4 解釈の問題

再読文字「当」と、「使」を用いた使役形がポイントである。

「当 ^ニ 」	「讀み」	まさに——(す)べし
「讀み」	「讀み」	当然——(する)べきだ・きつと——(する)はずだ
「使 ^ム A」	「讀み」	Aをして——(せ)しむ
「使 ^ム A」	「讀み」	Aに——させる

傍線部を書き下し文に改めると、「詩は当に人をして一たび覽て、語^レ尽くるも意余り有らしむべし」となる。傍線部にある「当」は訓点(返り点と送り仮名)の施し方から再読文字の用法であり、「まさに——(す)べし」と読み、「当然——(する)べきだ・きつと——(する)はずだ」という意味である。④は「当」を「——にあたりては」と読み、「——に当たっては」と解釈しているため、不適當である。「当^ニ」を、「——に今にも——ようになる」と解釈しているので不適當である。「今にも——ようになる」という訳になるのは、再読文字「將^レ且^ニ」である。

「使」を用いた使役形「使^ムA」は、「Aをして——(せ)しむ」と読み、「Aに——させる」と訳す。②は前半の「読ませる」だけで、後半に「させる」を訳出しておらず、不適當である。重要単語「尽」は、他動詞として「つくす(出し切る)」「自動詞として「つく(つきる・なくなる)」「副詞として「ことごとく(すべて)と読む用法がある。傍線部の送り仮名「クル」は自動詞「つく」の連体形の活用語尾であり、「語尽」で「言葉がなくなる」と直訳できる。直後の「一意有^レ余」と併せて考えると、「詩を朗読して鑑賞した後に余韻が残る」というように解釈できる。①「言葉をつくして」は、原文の「語^レ尽」を「語を尽くす」と他動詞として解釈しており不適當である。②・③「言葉が終わって」が、「尽^レく」の解釈としては適當である。④は「尽」の解釈がなく、また「言葉で表すよりも」という比較表現

は、不適當である。よって、正解は③。

問5 返り点の付け方と書き下し文との組合せの問題

傍線部とその直後の二文が対照的な関係にあると捉えることがポイントである。傍線部「当其時則重之。而非為其所加。」は、直後の二文と字数がほぼ同じであり、対応する語も対照的になっており、形式が揃えられていることに注目する。これは、表現の形式を揃えて意味の対照性を際立たせる、漢詩の対句表現に相当する技法である。傍線部直後の二つの文は「過^レ其時^レ則否^レ之。而非為其所損^レ也。」とあり、書き下し文は「其の時を過ぐれば則ち之を否む。而非其の損ずる所有るが為に非ざるなり。」となる。

当其時則重之。而非為其所加。
過^レ其時^レ則否^レ之。而非為其所損^レ也。

そこで、傍線部直後の二つの文と対照的であるような返り点の付け方と書き下し文の組合せを選ぶ。すなわち対句の形式に倣^レって返り点の付け方ができる限り一致し、対応する文字の品詞がほぼ一致するものを選ばばよい。よって、正解は①。

問6 内容説明の問題

【資料】Iは、「曾子固」すなわち曾鞏の発言を引用する形式で、その「十日菊」評が述べられている。発言の冒頭部「詩は、人に一たび読ませると、当然言葉が終わっても意味に余韻が生じるようにさせるべきである」という一文は、詩はどうあるべきかについての曾鞏の考えを示している(↓【設問解説】問4を参照)。曾鞏はそれを「古人」が注意を払い、鄭谷が「十日菊」を詠んだようなことがそれであるという。「古人」とは「昔の人」のことを言うが、漢文では「古人」や「古」の在り方が現状を評価する尺度や基準になることに注意する。つまり「古人・古」を主語とする叙述部分はすぐれていることを意味し、曾鞏は鄭谷の「十日菊」を、古人が心を用いた(↓【注】意を払った)ところを有しているとして肯定的に評価したのである。

【資料】IIは、「山谷」すなわち黄庭堅の立場の紹介と、黄庭堅自身の発言の引用から成っている。したがって、ここに黄庭堅の「十日菊」評が述べられていると言えらる。黄庭堅の立場を、筆者は「山谷反^レ以^レ詠^レ十日

菊』為^ス病^ハ在^ハ氣不^レ長^ニ（山谷反つて「十日の菊」を詠むを以て病ひは氣長ぜざるに在りと為す）」と紹介している。これは「山谷は反対に（鄭谷が）『十日菊』を詠んだことについて欠点は「氣」が「長」じていないことにあると考えた」と解釈できる。「病ひ（＝欠点）」を挙げているのであるから、黄庭堅の「十日菊」の評価は否定的であるとわかる。また「氣」について述べているのは、黄庭堅だけである。よって、**正解は①。**

問7 詩の鑑賞の問題

部分否定がポイントである。

未 ^ダ 必 ^ズ シ ^モ —— ^セ	読み	いまだかならずしも——（せ）ず
必 ^ズ シ ^モ —— ^セ	訳	必ずしも——（する）わけではない
		必ずしも——（する）とは限らない

第一句「節去蜂愁 蝶不知」は、「重陽の節句が過ぎてしまつて蜂はそれを悲しんでいるが蝶は気づかないで」と解釈することができる。「重陽の節句（九月九日）」には、同じく庭園を飛ぶ蜂と蝶であるが、十日になると、蜂は「節句が過ぎてしまつたことを」愁えて（飛ばない）が、蝶は「節句が過ぎてしまつたことを」知らない（ように前日と同じく晝の庭を繞る）」と対比的に描いている。①「蜂や蝶はまるでそれに気づかないように」は蜂と蝶を同等とみなして対比の関係を捉えておらず、不適当である。また、蜂は節句が過ぎたことに気づいたからこそ愁えたのであるから、②「蜂はまるでそれに気づかないように」は誤読であり、不適当である。

第四句「未^ダ必^ズシ^モ 秋香一夜 衰^ハ」（未だ必ずしも秋香一夜にして衰へず）には、部分否定「未^ダ必^ズシ^モ——^セ」（必ずしも——（する）わけではない）が用いられていることに注意して、「菊の花の秋の香りは必ずしも一夜で衰えてしまつたわけではない」と解釈することができる。③「香りは決して一夜で衰えるはずがない」は「決して——ない」と全部否定の訳し方になっており、不適当である。④「重陽の節句が過ぎてしまつても蝶はまるでそれに気づかないように、明け方の庭で折れてしまつた菊の枝の辺りを飛び回っている。十日になると菊の花の香りが衰えたと思うのは人の心が変わつてしまつ

たからであり、香りは必ずしも一夜で衰えたわけではないと嘆いている。」は、蝶に焦点を当てて蜂に言及していないが、対比の関係を踏まえており、「未^ダ必^ズシ^モ——^セ」の訳も部分否定になっている。よって、**正解は④。**